

特62-648



\*1200800265116\*



特



始

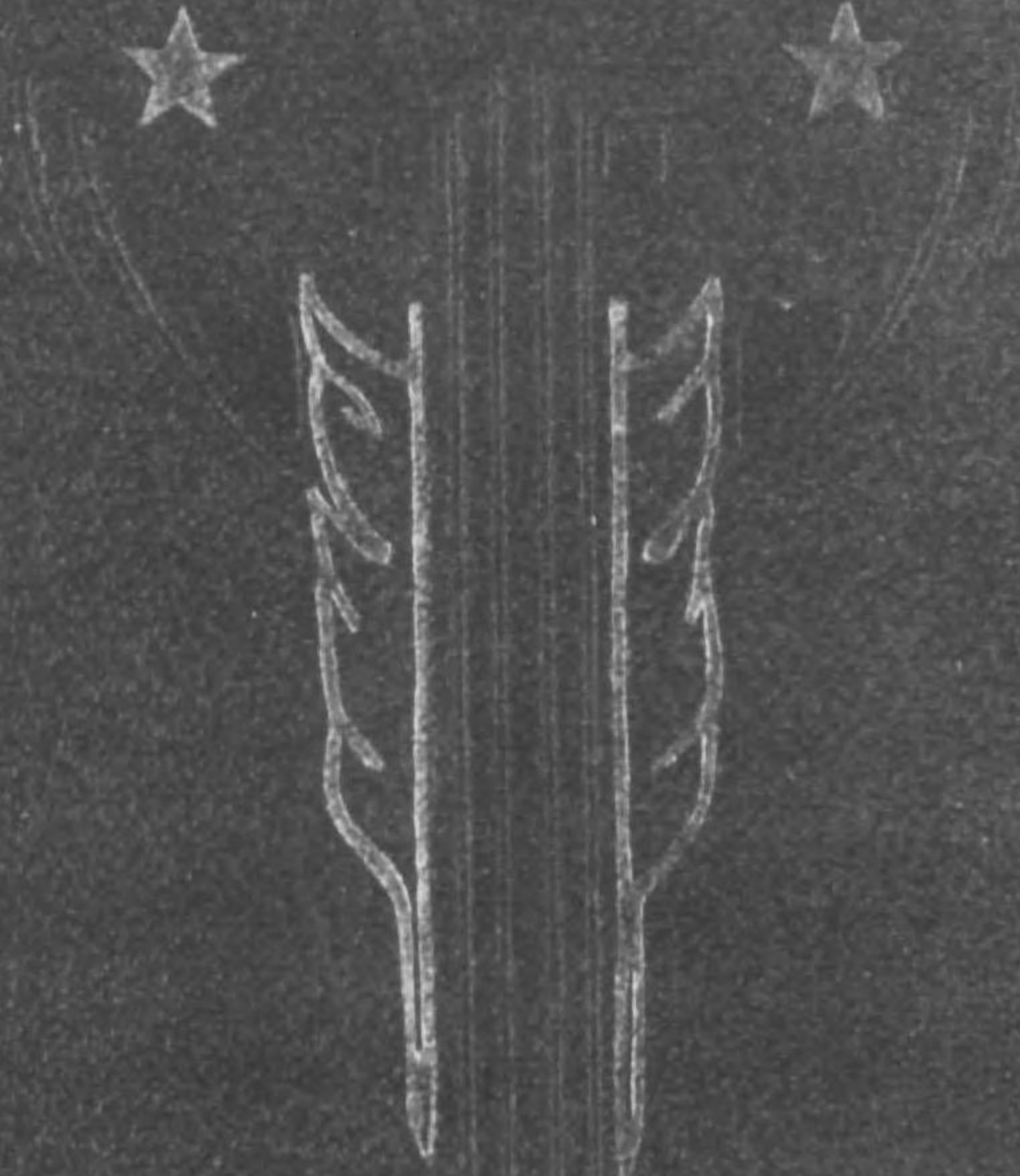


特62-648

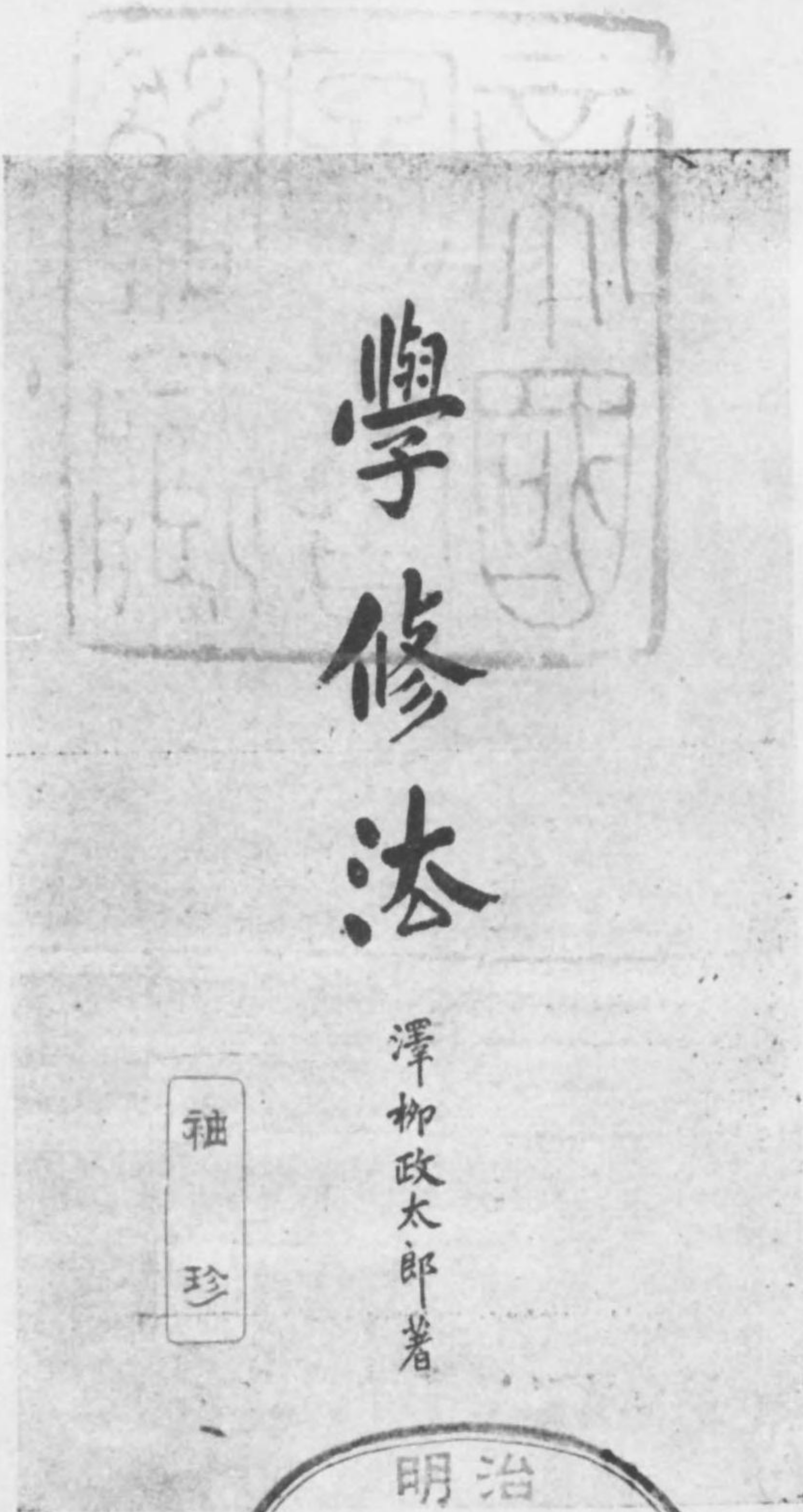


\*1200800265116\*

経歴年



特62  
648



學修法

澤柳政太郎著

袖  
珍

明治  
44.12.27  
内交

几上にて繙くと、車上にて覽ると、將た爐  
火を擁して誦讀すると、其の場合の如何を  
問はず、本書の如きは、常に之をポケット  
にし或は之を懷中にし、隨時隨處に、反復熟  
讀すべきものである。乃ち著者に乞うて袖  
珍本と爲し、携帶に便にして、以て讀者に  
提供した次第である。

同文館出版部

## 學 修 法

序

今日教育の普及進歩につれ、教育學教授法に關する研  
究の盛なるは誠に喜ぶべきことであるが、教育學教授法  
はもと教師の爲めに教師に向つて教育の方法を説くも  
のである。今日まで學生の爲に學生に向つて學修(學生  
の側から見た教育)の方法を説くものゝないのは、予の多  
年遺憾とした所である。本書は予がこの缺を補はんが  
爲に述べたもの。英米に行はるゝ幾多の勉強法 The Art

序

一

of Study や自修法 Self Culture に關する著書を參考したるも、その趣旨、範圍共に予の所謂學修法と同じからず、得る所が少なかつた。かくて學修法は幾んど創始の業である。されど學修の方法として此に説く所は、必ずしも新規な名案があるわけではない、多くは普通の説である。予は普通の説の最も價值あるを信するもの、且濫りに異説を立て、自ら快とするものではない。しかしながら世間に廣く受け取られた説に對し、予は遺憾ながら同意することの出来ないものも少くない。その主なるもの、二三を擧ぐれば、學生の獨立に關する説、學校時代を以て

最も大切な時期なりとする説、隨て社會は大なる學校なりとの説を非とする論、學校教育は基礎を作るを目的とすべく實用的に偏すべからずとする説、學校の課程を以て最も重しとする説、惡徳は傳染すると云ふ説、天稟の能力は學校選擇の標準として重きを置くべしとの説等である。これら世間普通の説に異なるものは、予が殊に深く自ら信する所のものである。かく敢て自家の意見を主張する所あるも、唯予は切に今日の學生がその學修の方法を誤まることなきを希望し、自ら本書を推獎する。本書を見るもの單に一讀するに止めず、その日々時々の

學修に之を應用して以て學問修養の功を全うせんことを祈る。

明治四十一年十二月

澤柳政太郎識す

第十三版の序

本書が四十一年の末を以て世に現はるゝや、意外に大方の歡迎する所となり、數月にして十二版を累ぬるに至つた。其の間僅に印刷植字の誤を正すに過ぎず、全般の修補は昨秋の頃を以てする豫想であつた。然るに他の用務の爲に妨げられ、遂に今年の初に至りて、漸く修正の志を達した。而かも大體の結構に於ては變更の要を見出さず、其の新なるは龍頭に東西先哲の金言を加へた一事に過ぎない。されど全體に涉り知友の批評を參考して修補したことは少くない。其の最も精密に批評され

たのは文部省視學官理學士瀨戸虎記君で、多く適切なる評として著者の喜んで同意したものであつた。京都高等工藝學校長工學博士中澤岩太君も數箇所綿密なる意見を寄せられ、著者は多く之に随つた。又廣島高等師範學校教授長谷川乙彦君の批評に負ふ所もある。更に東京府青山師範學校長瀧澤菊太郎君は其の學校上級生の「學修法を讀む」と題する作文百數十篇を示された。著者は尙他に幾多の批評をも参考した。今修正版を出すに當り、謹んで其の厚意を感謝する。

本書は素と數日間の速記に基いて成つたものであつ

た故、その文章は甚だ粗笨なものであつた。新版に於ては出來得る限り朱正を加へたつもりである。されば之を前版に比すれば、各ページの上に幾分改良の迹を認め得るであらうと信ずる。更に識者の批評を得て、再び修正する機會あらんことを著者は切望して已まない。

明治四十三年二月下旬

澤柳政太郎

しるす

# 學 修 法

## 目 次

第一章 緒論	1
第一節 學修法の必要	1
第二節 學修法の特に今日必要なる理由	10
第三節 學修法適用の範圍	16
第二章 學修法總則	20
第一節 學修の目的	20
第二節 學修の出發點	24

目 次



第三節 教育の効果は自發的奮勵と相須つものである……………三九

第四節 學校時代は集約的學修の時期……………四五

第五節 刻苦勵精……………五四

第六節 熱心に且つ眞面目に學修せよ……………六〇

第七節 注意……………六七

第八節 思考……………七五

第九節 讀書……………八三

第十節 觀察……………九〇

第十一節 新聞雜誌及小説……………九四

**第三章 知識の修得……………一〇九**

第一節 授業と學修……………一〇九

第二節 明瞭正確の知識……………一二六

第三節 系統的の知識……………一二一

第四節 學科に對する趣味……………一二四

第五節 諸學科に就いて……………一三〇

第六節 學生と創作……………一四三

第七節 試験……………一四六

第八節 落第……………一五六

第九節 受験の際に於ける不正行爲……………一六五

第十節 智力の發達……………一七一

**第四章 徳性の修養……………一七六**

第一節 青年の特質……………一七六

第二節 反省……………二八九

第三節 學生の生活……………一九三

第四節 獨立……………二一四

第五節 薄志弱行……………二二二

第六節 惡徳の傳染……………二二五

第七節 社會の趨勢……………二三〇

第八節 學生と教師……………二三九

第九節 學科と修養……………二四六

第十節 學校の賞罰……………二五〇

第十一節 交友……………二五八

第十二節 學校騒動……………二六七

第十三節 人格……………二八二

**第五章 身體の發育……………二八六**

第一節 規則正しき生活……………二八六

第二節 體操及び遊戲……………二八八

第三節 學生の娛樂……………二九三

第四節 柔弱の弊……………二九五

**第六章 専門學科及職業の選擇……………三〇二**

第一節 選擇の標準……………三〇二

第二節 家庭の事情……………三〇七

第三節 自己の長所と天賦の能力……………三一〇

第四節 選擇の時機……………三二三

學修法目次終

學修法 (修正改版)

澤柳政太郎著

第一章 緒論

第一節 學修法の必要

教育の必要なることは今日何人も一點の疑を容れない。國家は教育の制度を施き、或は教育を強制し、或は學校を設けて國民一般に教育を普及する方法を講ずる。世の父兄は争うて其の子女をして學に就かしめ教育を受けしめる。子女も亦競うて學校に入る。是に於て教

第一章 緒論 第一節 學修法の必要

育に關する研究は益、盛大となり、近時我國に於て刊行せられたる教育學や教授法に關する著書は汗牛充棟も嘗ならない有様である。これ甚だ悦ぶべきことである。抑、教育とは如何なることを意味するか。教育は成熟したる者が、未だ成熟せざる者に向つて、道德的品性を養成せんが爲に施す所の有意にして、方法を備へた作用である。學者に依つて其の言葉に相違があるけれども、大體右に述べた意味に於て相一致して居るかと思ふ。併ながら動もすれば誤解を生ぜしめる憂があるかと思ふ。此定義に依れば、教育を受くる者は、専ら受働的であつて、活動的なるは教育を施す者の側に存するが如くに解せられる。既に教育と云ふ文字を見ても教へ育てるとあつて、教育者の働きを主として居る。教授と云ふことも教育者の側よりの働きで、教へ授けるので

ある。かくて教育者は働きかけて、被教育者は其の働きを受けるのに止まるが如き感がある。教育の一大作用である所の訓育の如きも、教育者の側より見たものである。されば訓育の手段方法は悉く教育者の側より働きかけたるものであつて、學生は單に其の影響を受けるに止まるが如き感がある。教育は果して教師の働きを主として見るべきものであらうか。教育の目的物は云ふまでもなく學生である。然るに學生は常に受け身になつて居つてよからうが。學生も亦教師と同様に活動することを要するのではあるまいか。

教育を受くる年齢が、七八歳乃至十歳位のものであつたならば、その精神の状態は、多くは受働的にして、自發的のことの少いのは已むを得ない。故に學科について興味を起すと云ふことも、自發的の興味では

なくて、多くは誘導されて起す所の興味であるのであらう。此の年輩の生徒は精神上に於ては、大體受け身の働を爲して居るのである。自發的に活動を爲すことは、よしあるとしても極めて少ないのである。併ながら年齢が漸々長じて中學時代の學生になつては、單に教師の教育的作用を感受するばかりでなく、自發的の働きをなすことが漸々多くなる。此の自發的の働きがあつて、教育の結果が益々増大するものと思ふ。如何に巧なる教育を施すとも、被教育者に於て、單に受働的の狀態に止つて居つたならば、教育の効果は甚だ少いと思ふ。それ故に教育學や、教授法に於て、生徒の自發的奮勵を誘導することに説き及ぶこともある。併ながらそれは教師に向つて云ふのであつて、學生に向つて自發的に努力せよと諭すのではない。予は生徒の側に於ける努

力を、生徒に向つて系統的に論ずることが、恰も教員に向つて教授訓練の方法を論ずると同様に肝要であると思ふ。

此の如き研究を名づけて茲に學修法と稱へたのである。固より適當の名稱であるとは考へない。主として勉強の方法を論ずるのであるから、或は勉強法と名づけた方がよいかも知れない。又教授だけに對するものとして見れば、受業法と命名するのが適當であらうと思ふ。併ながら教授法といへば、専ら教授に對するものであつて、教育全體に對するものではなく、其の範圍が狭い。しかのみならず受業法では、受け身の意味のみに解せられて、生徒の側に於ける自發的努力を論ずるものとは見えない嫌がある。或は自發的の奮勵を主として論ずる邊より見て、自修法と稱しても宜からうかと思ふ。併ながら世間に既に

自修と云ふ名稱が存して居つて、自修法といふときには、獨修法と云ふ如き意味に解せらるゝ憂があらうかと思ふ。依つて今假に學修法と名づけたのである。更に言ひ換へれば、被教育者の側より見たる教育學と名づけたならば最も適當であらうと思ふ。

從來教育學と稱へた所のものは、實は教育者の側より見た教育學であつて、教育學の全部又は兩面を盡したのではない。されば學修法は眞の教育學の一半であると言ふことが出来る。從來の所謂教育學は此の一半を閑却して居つたのである。今日までの教育學は、如何に未成熟者を教育するかと云ふことを研究したものである。教師の力教育の方法を以て、未成熟者をよくすることを研究したものである。而して被教育者が自ら進んでよくなる邊を忘れて居る。學修法はこ

の忘れられた邊を主として論ずるものである。教師に、教育學が、必要である如く、學生には學修法が必要である。

固より教育學を學ばざる者も、尙ほ教育に従事することが出来、又現に教師となつて居る如く、學生も亦學修法を學ばずとも、自ら學修の方法を發明會得して、これに依つて學修をして居る者もある。併ながら如何に勉強すべきか、如何に學修すべきかを知ることに最も肝要なるは疑を容れない。しかるに從來學修法が閑却されて毫も講究されなかつたのは一大缺點である。學生のために洵に遺憾とすべきことである。

古來自から教育して英雄となつた者が少くない。或は天下の豪傑は多くは自ら教育し、學修した者であるとさへ言はれるのである。か

く學修法の何たるを知らずして、よく其の勉強の方法を會得した者も少くはない。恰も衛生の學理を知らずして、而も實際健康を保つ者があるのと同様である。さればとて衛生學は無用ではない。健康を十分に保全する爲には、衛生法を一通り心得て居ることが必要である。學理の心得あるものは危険に陥る恐が少ない。現在數百萬の學生中には、特に之に向つて學修法を説く必要のない者もあるであらう。併ながら大多數の者について云へば、如何に自ら教育すべきかを説くことの必要があらうと信ずる。

今日同一の學校に於て、同一の教師に就き、同一の教科書に依つて教育を受けつゝあるに拘らず、その學生の間に大なる優劣を生ずるのは何故であらうか。一には學生の天稟に依ることは疑を容れない。即ち

天性出来るものもある。天性出来ないものもある。かゝて實際に於て大なる差を生ずる。併ながら學生間に於ける優劣の差は、悉く天性にのみ依るものであると論定することは出来ない。或る者は大に勉強するが故に優等となり、或る者は勉強することの少ないが故に劣等となる。即ち勉強の分量の差に依つて、優劣の差を生ずる。是も疑を容れることの出来ない事實である。されど多く勉強する者必ずしも優等でなく、少く勉強する者必ずしも劣等ではない。この事實も亦否認することが出来ない。勉強の方法が其の宜しきを得て居ると、得て居らないのとに依つて、其の成績の上に優劣の差を生ずることも亦必ずあるのである。言ひ換へると學修の方法の如何によつて、優劣の差を生ずるものである。

從來世間に讀書に關する研究、即ち讀書法と稱するものがある。書物を讀むにも其の方法があるのである。まして讀書よりも一層廣い所の教育を受くるに就いて、其の方法がないと云ふ筈はない。學修法は必ずなかるべからざるものである。

學修法は獨學生のために説くものではない。主として學校に於て教育を受けつゝある者に對して、如何に教育を受くべきか、教師の教育上の働に對して、學生は如何に働くべきかを論究せんとするものである。學修法は獨學自修法と混同すべきものではない。

## 第二節 學修法の特に今日必要なる理由

學修法の特に今日必要なる所以は、之れに關する研究が從來全く忘

却されて居たと云ふのが其の一つである。第二には今日教育を受けると云ふことは、動かすべからざる必要となり、習慣ともなり、又社會の風潮ともなつて、何人も之に抵抗することが出来ない。それ故に教育を受ける者は、何が故に教育を受けるといふことを考へるまでもなく、唯今日は教育を受けなければならぬ時勢であるからして、教育を受けると云ふ有様である。父兄に於ても、其の子弟に教育を受けさせるのは當然のこととなつて居る。今日は何の爲に教育を受けると云ふことを問ふ者がない。而して一方には教育の方法は益々攻究されて、如何に教育を授くべきかの研究は、愈々精微を極めるやうになつて來た。故に教育を受けるとは、今日非常に容易のことになつた。到る處に學校あり、到る處に教員あり、到る處に書物がある。何人も何等の苦心



をせず容易に教育を受ける。之を三四十年前に比べると大變な相違である。初めて學校に入學した兒童も、或は遠き距離を通學しなければならなかつた。中學程度の學校に至つては、僅に指を屈する位しかなかつた。故に學ばんとしても學ぶ學校もなかつた。教師の如きもその數は極めて少なかつた。教育の方法は今日から見れば無理と云はなければならぬものであつた。それ故に學に就くと云ふことは、兒童少年にあつては大に稱讚すべきことで、篤志のことであつた。學校に通學するを厭はないのを見て、父兄も之を稱讚し、世人も感心のこととしたのであつた。中學程度の學校に入學するに至つては、更に一層の稱讚すべきこととせられたほど稀有のことであつた。入學する者に於て一大奮發を要した。父兄に於ても亦種々考慮の末、決定したの

であつた。學校も少なかつたから笈を負うて數百里の外に學ぶと云ふことが、學に志す者の探らなければならぬ方法であつた。書物の如きも之を得ることは、今日では想像も出來ぬほど困難であつた。或は多年心掛けて居つて、探し出し、之を借りて寫取つたと云ふことは珍らしくなかつたのである。當時は教育を受けると云ふことは非常に困難なことであつた。決して今日の如く便利でなかつた。

今日教育の設備が整ひ、何人も學に就くことが出来るやうになつたのは、寔に悦ぶべきことである。一國の文明も是に依つて大いに進歩することが出来るのである。併ながら學修する者に就いて考へると、今日其の方法が簡便なるがために、却つて不利益の之に伴ふことが生じて來た。従前にあつては學校に入り、教師に就き、書物を得ると云ふ

人生に於ては、心の労働

ことが困難であつた爲に、特志の者があつて一たび志を立てて學に就くときには、非常なる奮勵努力を以つて學業に従事したのである。今日では學に就くことは尋常のこと、當然のことであつて、又甚だ容易のことである。その爲に自然に奮勵することがなくなつた傾きがある。ことに於て學修法の必要が特に生じて來る。従前は學に就くことを得た者は、十分に學修法の精神骨髓を自得して居つたと言つても宜かつたのである。今日は求めずして教育は授けらるゝ如き狀況であるから、何人も刻苦勵精して教育の効果を收めようとしなさい。古は教育の法が具はつて居なかつた爲に、學生は自ら大に奮勵せざるを得なかつた。今日はあまり教育の方法が具はつた爲に、唯、何といふこともなく學に就く者が多く、特別に奮勵することを要しない有様である。然

に由るにあらざるに、何れも物に生ずる能はざる。又努力して又努力し、是れ即ち人生なり。アセツ、フェル

るに自ら奮勵せずして教育の効果を全うすることの不可能なるは、今も昔も同じことである。四圍の事情が如何に變化しても、人間の心が根本から改造されない限りは、この眞理に變りはない。今日の時勢に遭遇して、此の教育上の便宜を受くる者は、古人の苦學困難に鑑み、大に己の幸福なることを感じて、一層奮發しなければならぬ筈である。然るに單に教育を受けてさへ居ればそれでよいやうに考へて居るものが多い。これは教育の普及に伴うて知らず識らず生じた弊害である。一利一害といふのは此の事であらう。今日の學生たるもの、能く注意しなければ、知らず識らず此の弊に陥る。此に於て、學修法を學びて以て自ら救ふことの必要が生ずる。

予は今日の急務は教育は必ず學修と伴ふべきものであることを主

にあらす。  
(レイノ  
ールド)

學 修 法

張するにあると信ずる。教育者の働と學生の働とが能く一致して始めて教育の實が擧がると思ふ。教育者の働きが如何に理窟に協つて居つても、巧妙であつても、學生の働が能くそれと出合はなかつたならば教育の効が少ないと信ずる。而して學生の働きを論ずるのが學修法である。

一六

第三節 學修法適用の範圍

學修法は主として被教育者の自發的奮勵を論ずる者である。故に小學校兒童の如き、其の精神發育の程度が尙ほ自働的態度にある者に就ては適用することが出来ない。少くも高等小學校の兒童及中學校又は之と同等以上の學生に適用すべき者である。元來眞に教員とし

て優良なる者は、よく生徒の自發的奮勵を指導するものである。随つて、之を如何に指導すべきかを研究しなければならぬ。又學生の側から考ふれば、如何に自發的の努力を爲すべきか、如何なる方向に向ひ、如何なる程度に於て奮勵すべきか、てふことに注意するを要するのである。前節に於て、今日は教育の方法の具はれるがために、學生は何等の困難を感じず、自ら自發的奮勵を怠る傾向のあることを説いたが、自發的努力が少しもないと云ふことではない。若し全く自發的努力がなかつたならば、智徳の進歩は見る事が出来ないであらう。程度に於て大に足らぬ所があり、或は方角を誤つて働かせて居ることを意味して云うたのである。教授法が巧妙であるが爲に、自發的奮勵が却つて抑制せらるゝが如き場合を指して云つたのである。學力の進歩は知識

を注入するのみに依つて出來得るものでない。徳性の修養も單に道徳上の訓誡を聞き、徳性涵養の方法を解することに依つて、その目的を達するものではない。體育に於ては何人も單に身體發育の方法や、筋肉を強健にする方法を知るのみを以て満足せず、自ら身體を働かし、種種の運動を爲して、初めて體育の目的を達することを會得して居る。故に體育の方面に於て自發的奮勵を説く必要は格別ない。けれども知育並に德育の二方面に於ては、自ら奮勵努力することをせずして、單に教師の教授訓育を受くるを以て足れりとするが如き傾きがある。知育、德育に於ても體育と同じく自發的奮勵と教師の教育的作用と相須たなければ、其の目的を達することは出來ない。殊に中等程度以上の學校に於ては、教師の巧妙なる手段方法よりも、生徒の奮勵努力に須

つことが多い。果して然らば中學程度以上の學校に於ては、教師が教授法を研究するよりも、寧ろ學生が學修法を研究するを以て一層必要なりとする。要するに學修法は専ら中等程度以上の學校生徒に適用されるものと見るべきである。

## 第二章 學修法總則

## 第一節 學修の目的

學修法に於いて第一に論定を要するものは學修の目的でなければならぬ。學修の目的は何であらうか。思ふに學修の目的は教育の目的と別ではない。教育の目的即ち學修の目的でなければならぬ。教育の目的は從來教育學に於て十分に學者に依つて論究されて居る。素より之に關して多くの教育學者の説く所が悉く一致して居る譯ではないが、一致しないからとて、氷炭相容れざるが如きものではない。その教育の目的は直ちに取つて學修の目的となして差支はない。唯、

之れを觀察する方面を少しく變ずるまで、よいと信ずる。即ち學生が教育を受くる目的は如何と云ふ邊より眺むるにとゞまるので、其の目的は教育者が教育を授くる目的と相背馳すべきものではない。教育者の側より眺めるのと、學生の側より眺めるのとの違はあるけれども、元來同一のものでなければならぬ。教育者に取つて其の教育の目的を論定することが必要であるとすれば、學生に取つて學修の目的を論定することは同様に必要である。否、教育者に取つてよりも學生に取つては一層必要である。何となれば其の目的に到達せんとするものは教育者にあらずして學生であるからである。學生は必ず教育の目的に到達しなければならぬ。教育者は、學生をして其の目的に到達せしむるために必要な補助便宜を與へるものである。然らば教育

の目的即ち學修の目的を明にすることは、教育者に取つてよりも、學生に取つて一層必要である。

今日の教育者は教育學を修め、教育の目的を明にして居るが故に、大體その向ふ所を知つて居る。しかるに今日の學生は教育學を修むるものでない。然らば如何にして教育の目的、言ひ換へれば學修の目的を明にするであらうか。其の方法は具はつて居るであらうか。教育者は教育の目的を學生に向つて了解せしむることを努めて居るであらうか。今日の教育者は可なり盛に教育の目的を研究するけれども、それは主として自己のためであつて、學生に之を説明せんが爲ではないやうに見受けられる。

六七歳の小學兒童に向つてその學修の目的を了解せしむることは

困難である。故に此の時期に於ては教育者が教育の目的を定めて、兒童を導いて其の目的に到達させる外はない。中學時代になると、精神の發育が或る程度に達して居るから、生徒をして何が故に學修すべきか、何が故に教育を受くるのであるかを了解せしむることは必ずしも難しとしない。眞に之を了解したならば、學生たる者は常に其の目的を達せんことを期し、之に向つて歩を進むることになるであらう。若し其の目的を明にせざるときは、其の奮勵努力を如何なる方向に進ましめてよいかを知らず、或は反對の方向に走ることがないとも限らない。又目的を定むることがあつても、或は卑近に失したり、或は誤ることがあつたならば、目的を定めた効果はない。

教育學に於て論定する所に依れば、教育の目的は甚だ宏遠なもので、

多くは道徳的、生活、國民的生活を完成せしむるにあると言ふが如くに説くのである。學生は果してかゝる高尚なる目的を以て其の教育を受けつゝあるであらうか。前章に述べた如く、或は今日の時勢では、教育を受けねばならぬから教育を受けると考へて居る者が多からう。或は又教育を受けなければ職業を得ることが出来ないから、職業の爲に教育を受けると云ふ考を持つて居る者も少くない。或は何事をなすにも教育は必要であるから教育を受けるとであると、漠然考へて居る者も多い。要するに今日の學生一般が目的とする所のものは、多くは客觀的である、實利的である。即ち職業の爲であるか、社會に於ける或は事業を經營する爲であるか、或は立身出世の爲であるか、或は名譽のためか、利益のためかである。多くは自己以外に教育の目的を置い

て居る傾がある。學問を修むる目的は品性の修養の爲であるといふことを學校で教訓されても、實際これを以て學修の目的とするものは果して幾何あらう。多くは前に舉げた實際的實利的の目的の爲に勉強して居るのではなからうか。或は中には目的といふべきものさへ定めず、徒らに教育を受けつゝあるものが多いのではなからうか。小學時代にありては唯、何といふことなく、教育を受けつゝあるのも已むを得ないが、中學時代に至つて尙ほ此の如き漠然たる考を以て居つてよからうか。若し中學時代には目的を立て、學修しなければならぬとしたならば、その目的は正しいもので、又間違はないものでなければならぬ。

今日學生の目的とする所果して上述の如しとすれば、教育學に於て

論定する所の目的と大に相違して居る。教育の目的は前に述べた如く學修の目的でなければならぬ。教育の目的は從來幾多の學者が研究した所で、その説く所に多少の相違はあるけれども、大體に於て誤る所はなからうと思ふ。故に學生たる者も教育學に於て研究されたる目的を以て目的としたならば誤ることがなからう。教育學に於て定むる所の目的は、言はゞ、主觀的である。各自の徳性を涵養することである。其の智能を啓發することである。其の體格を健全に且つ強健にすることである。依て以て學生をして將來國家社會の有用なる人物たらしむることである。之れを學生の側より言へば、教育を受ける目的は、自己の徳性を涵養するにあり、自己の天賦の智能を啓發するにあり、自己の身體を健全に且つ強健に發育せしむるにある。此の數のも

のがよく達せられたならば、其の人は自然に社會に於て優勝の地位を占むことが出来る。即ち立身することも出来るのである。職業を得て立派なる生活を營むことも出来るのである。されば學に就くものは、その中學程度の教育を以て止まるものも、更に進んで高等の教育を受けるものも共に以上の如き宏遠なる目的を明に確立せんことを望むのである。教育學の論ずる所に依れば、以上に述べた宏遠なる目的を達することは、僅に小學教育を以て止まるものに向つても尙ほ且つ之を要求する。即ち國民をして其の徳性を涵養し國民としての生活に必要な普通の知識技能を啓發せしめんとして居るのである。されば進んで中等程度の教育を受くる者は言ふまでもなく、此の目的を十分に達せなくてはならぬ。



若し或る職業を得んが爲に教育を受くるのであるとしたならば、その目的の高下は別論として、學生たる者或は自ら判断して、或る學科は其の職業を得るに必要ならずとして、之を怠ることもあるであらう。教師の親切に訓誡することも職業を得るためには遵守する必要がないものとして顧みないかも知れない。或は立身出世を以て目的としたならば、學校に於て授くる所の學科の如き、多くはそれに直接の關係なきものとして十分の興味を感じないであらう。教師の訓誡も、或は實際社會に立つには迂濶のこととして顧みないかも知れない。之に反して道徳的生活、國民的生活を完全にせんが爲に教育を受くるのである、人格の修養の爲に學修を爲すのであると考へたならば、前述の職業のためにする勉強、若くは立身出世の爲にする學修とは大に其の趣

を異にすることがあるであらうと思ふ。學校に於て定められたる課程は、彼の宏遠な目的のためには總て必要缺くべからざるものと感じて、尙ほその足らざるを覺えるかも知れない。教師の訓誡の如きも、その徳性涵養の方法として誠實に服膺するは勿論、更に大に反省するに至るであらう。若し夫れ單に教育は受けなければならぬから、已むを得ずして受けると云ふが如き、殆ど目的を定めずして學修する者にあつては、學校の授業も、教師の訓誡も、何等の興味、何等の意味を有しないであらう。要するに、學生たる者、既に相當の年齢に達したる以上は、明瞭に、且つ正確に學修の目的を定める事が必要である。如何に其の目的を定むべきか。そは前に述べた如く教育學者の所謂教育の目的を移して以て學修の目的と爲さば大なる誤はない。

教育の目的は古來種々の變遷を経て來た。古代希臘にはその教育の理想があつた、羅馬には又その理想があつた、中世には中世の理想があり、文藝復興時代にはその理想がある、といふやうに、時代々々に教育の大目的があつた。又學者は學者で各、研究する所があつた。言葉は違ひ、意味も多少異なるけれども其の間に一致して來たことがある。今二三の教育家の意見を舉げて參考に供しよう。近世の大教育家ベスタロツチは愛と信仰とに基く道德及宗教の標準によりて、心身の諸能力を調和的に發達せしめ、人をして人たらしむるを以て教育の目的と説く。哲學者で且つ科學的教育學を組織したヘルバルトは教育は道德的品性を陶冶するを目的とすると説く。教育學者でこの派に屬するものは澤山あつて、チルレル、ストイ、ストリュンベル、ラインその他多く

の教育學者は大體これに據つて居る。大哲學者ヘーゲルは教育は人間を道德的にするものと説き、ヂーステルウエヒは眞善美のために自働せしむるのが教育の目的と論じ、スペンサーは完全なる生活の準備を爲すを以て教育の主眼と述べて居る。讀者よく此等學者の説を潜心考究して自身がこれまで教育を受くるを目的と考へて居つた所と比較したならば、必ず發明する所があらうと思ふ。

予は更にこゝに一言を加へて見たいと思ふ。凡て人間には四種の立場がある。(一)一個の人間としての立場、(二)國民の一人としての立場、(三)社會の一員としての立場、及び(四)家族の一人としての立場である。一個の人間としては人間としての徳性智能を發達せしめなければならぬ。國民としては國民としての生活、本分を全うするだけにならな

ければならぬ。社會の一人としては社會に對する義務を全うしなければならぬ。家族の一人としては、即ち子として、親として、夫婦として、又兄弟としての道を全うしなければならぬ。教育は實に是等の四種の關係に於て人間を養成するものである。如何なる人も此の四種の關係を離れることは出来ないものである。學生たる者は今日若くは他日必ず此の四種の立場を履むものである。故に其の關係に立つ際に於て完全に本分を盡す準備をせねばならぬ。是則ち學修の目的である。此中には、或は職業を得ると云ふことも包含される。立身すると云ふことも包含されて居るのである。併ながら職業を得ると言へば、單に社會に立つて一の事業を爲すに過ぎない。それを以て教育の目的、學修の目的となしては狭きに失して居り、又低きに失して居る。

立身の爲にすると云ふのも、社會に於て、或は國家に於て、相當の地位を得ると云ふに過ぎない。是も亦學修の目的としては一少部分のこととせねばならぬ。

以上の如く四種の立場に立つて完全に本分を盡すを以て學修の目的としたならば、學生たる者、その學校の定めたる諸種の學科を以て無用と考へるものもないであらう。教員の監督訓誡を以て無用なことを考へることはなからう。今日よりも更に大なる奮勵をなすにあらざれば、この目的を達することが出来ないと言ふことをも悟るであらう。此の四種の立場に於て完全にその本分を盡すための學修と考へるのは、實質に於て教育の目的を以て學修の目的となすといふことと大なる違はない。具體的に又適切に、且實際的に學修の目的を云へば、



はどその  
足らざる  
つかに氣が  
つかず。  
二重の無  
智と己無  
の無智な  
ることを  
知らざる  
をいふ。  
（プラト  
ン）  
爾の過を  
攻むるも  
師の過を  
下の人に  
陳ぶるも  
陳ぶるを  
即之を師  
にするに

禮を以て  
する能は  
ざるも然  
も必ず之  
を師とす  
るに心を  
以てす。  
（威南塘）  
過失を爲  
すは恥づ  
べし。過  
を改むる  
は恥づべ  
からず。  
（ルツソ  
）  
過ちて改  
むるに憚  
ることを  
孔子勿  
れんが  
過ちて改  
めたるも

學 修 法

三

自身にも又他からも知識の足らないことを認められるのが當然である。既に知識が不十分である、その経験も少ない、故にその考が往々違つて居るのも免れない。しかも未熟の考を以て正當のものとし、他人がその不當を指摘すると、悪い感情を起したり、又は反對する。不心得の甚しきものである。何人も自惚心はある。故に自分の考をよいと思ふのは恕すべしだが、若し他人がその間違つたことを指摘して呉るれば感謝すべきである。少くも己れに反省する必要がある。又智力の成熟しないものは、能く師長の云ふことを敬重するが當然である。しかるに先生の云ふ通りにするのは、或は見識のないことのやうに考へたり、獨立心が無いことのやうに思つたりする。畢竟自分がまだ成熟しない、知識の乏しい者であることを自認しないから、斯く誤まつた

考を起すのである。學修の出發點を取りちがへて居るものである。他年成長した後尙ほ知識が乏しいのは恥づべきことであるが、學修時代には毫も恥づることではない。立派な學生は能く自己の不完全なることを悟り、常にその不足を補はん。と心掛けて居るものである。道徳上のことも同様で、學生はその品性がまだ琢磨されてゐない、訓練されてゐない。それ故に學修して徳性の涵養を圖るのである。學生に道徳上の缺點のあるのは寧ろ當然といふべきである。缺點のあるのは恥づべきことではない、乏を補ひ徳を養はん。とせざるべからば、それこそ眞に恥づべきことである。過のあるのは已むを得ない、恥づるに及ばない、之を改めよう。としないことがあるならば、それは洵に恥づべきことである。これ未成熟といふことを道徳上にあてゝ説明

第二章 學修法總則 第二節 學修の出發點

三



は自ら取るものなり  
り。而して  
て。後者を  
重し。ギ  
す。ペ  
ン。ボ

學 修 法

學生の自發的奮勵を誘導喚起することを努むるに止まつて居つた。即ち生徒の活動を間接に喚起するに止まつて居る。而して直接に生徒に向つて、たとひ教師の誘發的作用がなくとも、自ら進んで奮勵すべしと、直接に自發的奮勵を喚起することを努めなかつた。學修法第一の原則は學生たる者は自發的奮勵をなすべしと云ふにある。ヘルバルト派の教育學に於て重きを置く所の興味論の如き、則ち此の點を一面より説いたものに外ならない。或は開發教授の效能を説いて注入教授の弊害を論ずるが如きも、矢張り此の點を認めたものである。學生の側より見たる教育學、即ち學修法に於ては直接に學生に向つて自發的奮勵を爲すべしと説かざるを得ない。學生は教師の誘導を待たず、自ら進んで奮勵しなければならぬ。

各人の教育に於て最も善なる方法は、自ら教育する所なり。コッソット

如何にして自發的奮勵を爲すことが出来るか。既に自發的と云ふ以上は自發する外はない。彼の巧妙の教授に依つて學生が興味を感じるは誘發的である、受働的である、純粹なる自發的ではない。されば自發的奮勵を爲すべしと云ふ外に、如何にして自發的奮勵を起すかと云ふことは説き難い。英雄は自ら教育すと云ふ。如何にして英雄自ら教育するかと云ふことは、説明することは出来ない。英雄なるが故に自ら教育するのであると云ふに止まるのである。唯、こゝには教育の効果は必ず自發的奮勵と相須つものであると云ふことを説明するに止まる。この説明を知つて、而して尙ほ自發的奮勵を爲さざる者は所謂度し難きものである。如何ともすべからざるものである。

如何に運動の方法に通曉しても、自ら運動せざるときには、筋肉の發

第二章 學修法總則 第三節 教育の效果は自發的奮勵と相須つものである

達を期することは出来ない。これ奮勵をなさぬからである。凡て發達成長は必ず自發的の要素に依る。他の誘因を必要とする場合もあるけれども、内部より發展するものにあらざれば成長發達と云ふことは出来ない。石木を積み重ねて家屋を作るとは出来るけれども、是は發達と云ふべきものではない。内部よりして自發的に發展するものがないからである。草木の如きは雨露光熱の助けを藉るけれども、内部の性質によりて自發的に發展するに依て、こゝに成長を見るのである。如何に外界の事情を都合よくするも、内部よりの發展がないときは成長發達を見ることが出来ない。此の理は人間の知識に於ても同様で、内部より自發的に奮勵するにあらざれば發達を見ることが出来ない。教師の教導が如何に熱心であつても、學校の設備が如何に

完全であつても、學生自身が自發的奮勵を爲さないならば、其の効果のないことは明である。固より自發的奮勵さへあれば、それで何事をも爲し遂げられるとは云ひない。恰も種子は發展する性質を具へて居つても、外界の縁を藉るにあらざれば成長することが出来ないと同じやうに、全く獨修獨學を以て智徳の進修上大なる効果を奏せんとしても、これは出来ない。學生の自發的の奮勵と相須つときは教師の働きも教科書の效用も此に十分に發揮されることになる。

今日の學生は果して能く自發的奮勵を爲して居るであらうか。學科に逐はれて間斷なく勉強して居る者はある。勉強をすると云ふ點に於ては幾分自發的の要素を含んで居るけれども、多くは受身の勉強である。已むを得ず、餘儀なくせられてするのである。自ら勉強しな



ければならぬことを悟つて奮勵するものとは違ふ。眞の勉強は自發的の奮勵でなければならぬ。若し立派な先生に就て講義を聞きさへすれば、大に得る處あるが如く考ふる者は、如上の理を無視する者である。立派な先生も學生の奮勵と相須たなかつたならば何等の用をなさない。自發的奮勵があるときには、或は教師は不完全であつても、教科書が乏しくあつても、その効果は大なるものである。前章に述べた如く、古は良師を得ることが難かつた。書物を得ることも困難であつた。併ながら大なる自發的の奮勵に依つて大に學修の効果を收めた者があつた。

自發的奮勵といふことに色々の程度がある。大なる奮勵と、小なる奮勵とある。如何なる學生でも小なる奮勵を爲さぬものはない、又誘

發的、他働的の奮勵を爲さぬものはない。今日の學生が少しなりとも知識を増進するのは不十分なりとは云へ、此の奮勵があるためである。されど予は今日の有様を以て満足することは出来ない。年と共に教師はよくなり、教科書も改良さるゝに拘らず、學生の實力は、その割合に善くならない。學生の實力は年々減ずるとさへ云ふものがある。茲に於て、自發的奮勵を絶叫するのである。一層大なる自發的奮勵を疾呼するのである。

#### 第四節 學校時代は集約的學修の時期

一。生。の。基。礎。は。學。校。時。代。に。あ。る。學校を出でたる後或は大に經驗する所があり、學校時代には豫想しなかつた程の事業を爲す者も、世間に

は往々ある。併ながら概論すれば、多くの人の一生の土臺は學校時代に置かれるものである。固よりその基礎の上に建築さるべきものは、學校を出た後にあるのは言を須たない。されど基礎は學校時代に築かれるのである。學校の在學は實に他日社會に出て活躍する準備である。若し在學時代に十分の基礎を築かなかつたならば、其の人は一生の間回復すべからざる損失を免れない。故に學校に於て専心學修するは人生の大事にして、學生に取つては最も大切のことである。修養は一生を通じて間斷なきを望む。眞に心掛の良き者は學校を出た後にも讀書を廢しない、又人格の修養を努めて怠らない。併ながら學校を出た後に於て爲す所の勉強修養は餘力で爲すのである。何人も學校を卒へて一定の仕事爲すときは心身の全力を提げ、時間の全部

を費さなければならぬ。然らば如何に修養を心懸くも、讀書をせんとするも、僅にある餘力餘暇を以てする外はない。但しこの餘力餘暇を以て爲す勉強の効能は少くない。少くも社會の進歩に伴ひ時勢に後れないのはその力である。併ながら學校時代に怠つたる所の損失を、既に社會に出て一定の業務を執つた後に補はんとするも到底出來得ることではない。故に學問修養は終身廢さぬと決心して能く實行するも、學校に在る間は全力を注ぎて専心學修に従事しなければならぬ。學校時代は集約的學修の時期である。學生たる者は此の時期を空過することなく、最も有効に學修することが大切である。

社會は大なる學校であると言はれる。社會に出て初めて活きた學問をなし、人物を研ぎ上げることが出來ると唱へる者がある。固より

人は事情に順應するものである。故に人は社會に出て色々得る所のあることは事實である。併ながら社會に於て眞に學問を進め人物の修養を爲すと云ふことは大に疑はしい。學校に於て學びたることを社會に出た後活用し應用することはある。之を見て世人は社會が知識を與ふるが如き考を起すのではあるまいか。社會の種々の事情に遭遇して初めて學校時代に涵養した人格品性の價值が表はれるのではあるまいか。世人は之を見て社會は人物を研ぎ上げる者であるとかへるのではあるまいか。眞に學問を進め人格を修むるのは學校に於てするのが最も適切で、且つ比較的容易である。眞の學校は矢張り學校であつて、社會ではない。即ち學校時代は、教育上學修上又人生上最も大切な時期と言はなければならぬ。この事は喋々を費すまで

もなく、多くの人の認むる所であらうと思ふ。けれども、予のこゝに繰り返して主張するのは、今日の學生の狀況を見、又世人の學校に對する考を察するに、往々學校時代を輕視する傾きがあるからである。事實を舉げて見よう。學校の課程を終へて或る事業に就くや、其の者は事業の支配者たり、或は自己の上役たる者に對しては十分の信用と尊敬とを拂ふ。其の支配者たり、上役たる者は其の人格に於て、其の學識に於て尊重すべきものがないとしても、尙ほ敬禮を失するが如きことはないのである。然るに其の者が學校にあつたときに、果して教師校長に對して十分の信用尊敬を表したのであらうか、疑ふべきものがある。其の人格、其の學識に於て、會社の重役に優る數等なるも、尙十分の敬禮を表さなかつた。社會に出でて或る事業に就けば容易に缺勤するこ

學業は青  
年あり  
譬へば  
耕す  
如し  
務め  
を  
如に  
務め  
を  
得ん  
べ  
狩を

學 修 法

五〇

とはしないが、學校では随分缺席する者が多い。斯くの如きは、一には學校並に其の事業を重大視して居らない爲であらうと思ふ。學生が若し學校の時期を以て、卒業後の時期よりも軽く見るが如きことがあらば、國家社會の爲に甚だ憂ふべきことである。

學校時代は人の一生に取つて、何れの時期よりも最も大切な時期である。此の時期に於て怠ることがあつたならば、他日其の回復は決して爲すことが出来ない。世の中に出た後に於ては、一の事業に失敗したる者も他の事業に於て成功する者があり、一たび蹉跎し再び失敗しても、終に成功する者がある。卒業後に於ける或る時期を空過することがあつても、其の回復の道はないではない。學校に於ける時期を空過するときには、一生回復することは出来ない。學校は専心に教育

谷掖齋

日暮一  
び移  
れた

を施す所である。其の時代は専心に教育を受くる時代である。其の時代は専心に學修する時代である。學生が全力を擧げて自發的奮勵を爲すべき時代である。若し此の時期に於て十分なる奮勵を爲さなかつたならば、其の受くる所の結果は恐るべきものがある。

學校を卒業して、世の中に立つに當つても亦自己の奮勵に須ち努力に須つことが多いけれども、此時代には却つて人の指揮命令に依つて働くことが寧ろ多いのである。學校に於ては教育を受くると同時に自發的奮勵を爲さなければならぬ。然るに今日の學生は却つて學校に於ては受働的である。其の活動するのは却つて學校を出た後にあると考へるものがある。卒業後に於ける活動も固より希望すべきであるが、心身の活動は學校時代に於て最も活潑であり、又活潑でなければ

再、來、の、千、歳、  
な、既、に、離、形、今、  
神、れ、に、萬、  
古、の、生、の、  
我、の、事、業、  
學、藝、事、業、  
豈、悠、々、な、  
や、る、べ、く、  
問、象、山、  
久、

學 修 法

五

ば、な、ら、ぬ。卒業後に於ては前に言ふが如く、實際多くは受身の動作を  
することが却つて必要である。少くとも數年或は十數年の間は受働  
的に働くのである。誠實に與へられたる仕事をすると云ふことは、今  
日學校卒業生に向つて社會の常に希望する所である。たとひ十數年  
の後獨立して自ら事業を営むことになつても、或は習慣に依り、或は種  
種の事情に牽制せられて、自由自在の活動は出來ない。故に人の活動  
は寧ろ學校時代にある。又學校時代にあるべきであると斷言して過  
言でない。學校にある間に活動することが出來ぬ如くに考へるのは  
大なる誤である。而も今日は此の誤に陥るものが多い。教師の授く  
ることを能く受入るゝのを以てよい勉強家と見做す。甚だ嘆すべき  
である。教育は固より教師の補助を要するけれども、其の目的を達す

る爲には學生の活潑なる自發的奮勵を要するものである。

或は學校にある時には本當に勉強は出來ない、課業に逐はれたり、試  
験に追はれたりして自由に勉強は出來ない、眞の勉強は學校を出た後  
にするのであるなど考ふるものもある。全然間違つて居る。本當の  
勉強は學校に居る間に出來る。學校を出てからは決して身にしみた  
勉強は出來るものでない。學校を出て教師になつたりして職務とし  
て尙ほ學問を續けて居るものでも學校に居つた時ほど勉強が出來な  
い。これは多くの人の經驗である。多くの人は學校の時期を十分有  
効に經過しなかつた、而かも學校にある間に最も得る所があつたので  
ある。學校時代を以て最も大切なときなりと悟り、能くこの時期を利  
用するときには、その得る所は非常に大なる者がある。予の如きも學

校を出て後に眞の勉強が出来る。否眞の勉強が始まると考へて居つて、學校時代に十分勉強しなかつた。學校を出た後は常に勉強を心掛けて居つた。しかし今から能く考へて見るに、教育上の効力は學校時代の方が遙に大なりしことを覺るのである。随つて學校に居つた時尙ほ一層勉強したならば善かつたと及ばぬ後悔をして居る。自己の此の苦き經驗から年少學生に希望することが殊に切である。

### 第五節 刻苦勵精

學校は集約的學修を爲す所であるから、學生が刻苦勵精することは當然のことである。何れの學校の卒業式に於ても、刻苦勵精の功空しからずして卒業證書を受くるの榮を荷ふ、と云ふ言を聞かざること

ない。實に刻苦勵精は最も大切のことである。今日の學生は果して眞に刻苦勵精して居るであらうか。卒業證書は果して刻苦勵精の結果であらうか。予は誠實に嚴格に此の刻苦勵精の實を擧げんことを學生に向つて希望する者である。學校の種類の何たるを問はず、その授くる所の學科は少くない。學生が學科に追はれて餘暇のないと云ふことは事實である。其の所謂勉強に費す時間は決して少しとしない。併ながら是を以て直ちに刻苦勵精するものと見ることは出来ない。

今日は何れの教科書にも註解の如きものが出来て居る。學生は多くは之に便つて居るやうである。或は學科の意義を十分に理解することをせずして單に記憶し暗誦せんとする傾がある。數學の理窟も



學問の快樂を感ずることの出來ぬ者は、勉強を以て非常なる苦痛と思ふであらう。學修して眞に智能を啓發する者は、勉強を以て一大快樂と見るであらう。前に擧げたるが如く、理解せざるものを徒らに暗誦せんとするが如きは、快樂ではなくて苦痛である。併ながら刻苦勵精して、例へば數學上の問題を解くことを得たならば、何人でも必ず一種の快樂を感ずる。總じて學を修むるを以て苦痛となすは、眞に學問を解せざるが爲である。若くは之を修むる方法を誤る爲である。此に刻苦勵精すべしと云ふのは、安逸を貪らず、努力すべきに努力せよと云ふに過ぎないのである。かの了解せざるを徒らに記憶せんとするが如きは、決して努力すべき所に努力する所以ではない。要するに學生たる者は眞面目に且つ嚴格に刻苦勵精の實を擧げなければならぬ。

これ學修法に於ても最も肝要とする所である。

手輕に學問が出来るやうになつたために生じた弊は前に述べたが、今日の學生はこの弊に顧みることをしないばかりでなく、益、簡便に愈容易に學問せんと望んで居る。簡便に且容易に實力が養へようか。さういふ理窟はなからう。若しそれが得られるならば、卒業式に於て、卒業が勵精刻苦の結果であるといふのは、贊辭ではない、祝辭ではない、寧ろ侮辱である。なぜならば骨を折らずして得られることを骨を折つて得たといふのは、愚であるといふと同じであるから、簡便に得られることは簡便に得ることを努むるがよい。骨を折らなければならぬことは骨を折つてするのが當然である。數學の問題を解くに、考へないで、直ちに解式を見るのは、骨を折るべきに骨を折らないのである。



自ら苦んで得た答も、解式を見て得た答も同一であるが、智力の練習上に於ける結果は非常の差がある。解式を見たり、人に聞いたりしたときには、智力の練習上には何等の得る所がない、零である。自ら考へるときには、よし、答を得なくとも能力練習上には大なる益がある。要するに刻苦勵精は學修上必要でありとしたならば、學生たるものは進んでこれに當るべきである。刻苦勵精を避けんとするは氣力ある學生の爲さざる所である。

### 第六節 熱心に且つ眞面目に學修せよ

今日の學生の中には父兄が學校に送るが故に學校に入り、己むを得ず教育を受けて居ると云ふが如き状態のものがある。學生自ら進ん

で熱心に教育を望んで居るのでないやうな者がある。教育を授けるが故に之を受けるに過ぎないと云ふ有様がある。斯の如くして受授されたる教育は格別の効能がない。渴する者に水を與ふれば初めて水の價值がある。渴せざる者に對しては水は何等の値打がない、否、水に値打のないのではない、値打を發揮しないのである。教育を熱望せざる者に教育を與ふるも同様である。今日教育を受け、業を卒へた者が用に立たないと云ふ非難のあるのも、則ちこの熱心のなかつたことが大なる原因を爲して居るのではあるまいか。今日の教育は死んだ教育であると云ふ非難のあるのも、教育其の物が果して死んで居るのでなく、受ける者が之を活用するよう受けぬのではあるまいか。一方には教育の必要が常に唱へられて居るが、教育を授けることの必要

よりも能く之を受けることが一層必要であるのである。而して之を受けたいと云ふ渴望がないときには、教育を授けても其の効能が少い。義務教育即ち小學校教育の如きは之を望むと望まざるとを問はず、國家の政策上國民に強ふるものである。併ながら中等以上の教育に至つては任意の教育である。これらの學校に學ぶ者は、進んで教育を求むる者と言はなければならぬ。然るに之を實際の状況に見るに、今日相當の資産あるものゝ子弟は、中等教育を受けるのが一の習慣の如き風をなして居るが、教育を受けるのは流行を逐ふやうなものではない。教育の効を眞に全うせんとする者は、熱心を以て之を求めなければその甲斐がない。

教育は熱心を以て之を求むる必要がないであらうか。學生時代は

他日の準備を爲す時代である。この準備にして熱心に用意されなかつたならば、他日種々の故障を見ることは怪むに足らない。若し教育を受けるに當りて十分の熱心がないとすれば、或は却つて之を求めない方がましかとも思ふ。任意の教育は何人も修めなければならぬのではない。苟も教育を受けるとは第一に熱心がなければならぬ。教育は人生の戰鬪準備をなすものである。故に眞面目に且熱心に之に従事すべきは當然のことである。學生が今日相當の時間を勉強に費すは事實である。併ながら若し眞面目に之をなさんとする精神がなかつたときには、其の費す勞力時間は何等の効果をも生じない。いやいや其の學科を修めて居る者も少くないやうである。斯く不眞面目であつたならば、到底學修の目的を達することは出来ぬ。日々の課

程をよい加減にして過ぎず者も多いやうである。斯く経過するときには、眞に學問の快樂を悟ることは出來ず、修養の尙ぶべきことを解することとも出來ずに終るであらう。

學者の説く所に依れば、人間は眞なるもの、善なるもの、美なるものを愛する情があると云ふ。此の眞善美は則ち教育が與へんとする所の知識であり、道徳である。然らば人間にはこの知識道徳を愛する所の情が、自然備はつて居るのである。學生たるものは眞善美を欲望する情の最も強烈なる者でなければならぬ。既に其の情が強烈であつたならば、之を求むるに熱心に、之を得るに眞面目ならざるを得ない。熱心に、且つ眞面目に學修すると云ふことは、人爲的に強ひて努むるのではない。人間の本性に具はつて居る眞善美に對する情操の自然の發

動であると言つても宜い。

若し學生に學修に對する熱心なく、又眞面目の考がないとしたならば、大に責めなければならぬ。一つの認容すべき事情は今日教育が普及し、教育を受くる手段方法が餘り簡易便宜になつたと云ふことである。斯の如き事情が生じて來た爲めに、學生が知らず識らず熱心を缺き、眞面目を缺くに至るとしたならば、心ある學生は大に此の點に向つて注意をし、反省しなければならぬ。予の望む所は、學生の教育に對する、恰も渴者の飲を求むるが如くならんことである。而して是れは當然の希望で決して無理なことではないと信ずる。果して學生が教育に對して熱望し、眞面目に之を求めようとしたならば、學修の効果は大なるものがあらう。この熱心と眞面目とが闕けて居るならば、假令教

育はこれを受けても數年の間勉強しても其の効果は少ない。社會に出て働くときに至つて必ず準備の不足を後悔するであらう。

前數節に述べた通り、學修法の第一則は大なる自發的奮勵を爲すにある。この自發的奮勵は熱心と眞面目とがなければ出來ぬ。然らばこゝに述べるのは別のことではない、自發的奮勵をせよといふと同じである。又學校時代は集約的學修の時期で、人の一生中最も大切な時期、一生の土臺を置く時であると論じた。この點から考へて見ても熱心に眞面目に學事に従ふのは當然のことである。不熱心に不眞面目に此の學修をなすものは一生の基礎を据ゑるに心なきものである。又前節に刻苦勵精することがあつて始めて學修の効を全うすることが出來ると説いた。刻苦勵精は必ず熱心と眞面目とが伴はなければ

出來ぬことである。學生たるもの虚心平氣に自分は能く學修に熱心であるか、學修に眞面目であるかと自問自答するがよい。

### 第七節 注意

凡そ學修に注意の必要なるは多言を要せざる所である。若し注意することがないならば、見聞する所のものも何等の意味なく、之を記憶することも、之を了解することも出來ない。然らば如何にしてこの注意と稱する働きが起るか、と云ふに、或は外界の刺戟若くは強き感動に依つて生ずることがある。今こゝに突然大聲を聴くときには、何人も自然にこれに注意するであらう。次には我々が興味を感じるものに對しては自ら注意する。子供がその面白く感ずる所のものに對して、

精神を集中するのは何人も實驗する所である。次には何等の刺戟なく、又興味を感じざるに拘らず、我が精神の力、術語を以て言へば、意志の力に依つて心の働きを集中すると云ふことがある。

第一第二の注意は自然に起る所のものであり、第三の注意は故意の注意である。少年の時代には、其の注意は多くは自然不任意の注意即ち前に挙げた第一第二の種類の注意であるが、既に中學時代になると、第一第二の注意の外に、任意の注意をなすことが出来る。教育學に於て興味を喚び起すことを重く視るのは、即ち兒童の注意を惹いて、之に依つて教育の効果を全うせんが爲である。中學時代に於ても教授する事柄に興味があり、或は其の方法が巧であるときには、生徒は自然に之に注意を向けるやうになる。この時代の青年に對しても自然不任

意の注意も必要であるけれども、學生たる者は進んで、有意故意の注意を以て學修しなければならぬ。

注意の力は練習に依つて之を養成することが出来る。世の中に注意深い人と、不注意な人とがあると同じく、學生の中にも注意深いものと、不注意のものがある。而して注意深い學生は、不注意のものに比して、學修の大なる効果を收むることが出来る。不注意なる學生は同一の教育を受けてもその効果は極めて少ない。

自然に起る注意にも人によりて鋭鈍の差がないが、概して各人に通じて略同一であると云つてよからう。注意力に相違のあるのは主として任意の注意に就てである。而して其の差は中々大なるものがある。如何にして注意の力を養成するかと云ふに要は練習を

重ねると云ふことに歸するのである。心理學に於て種々の研究はあるけれども、注意の力を養成するに格段に特効ある方法はない。平たく言へば、常に學修せんとする事に精神を集注せんと努めて已まないのである。長く務めて已まない者は注意深き人となる。その心懸のない者は不注意の人となるを免れない。

不注意に就ては大體二種に別つことが出来る。一つは或る一點を強く且つ明に考へないと云ふことである。全く精神を働かさないのである。第二の種類は思想が常に浮動して長く一點に集注しないのである。言換へれば一時強く又明に或る事を考へることがあつても、その働を長く繼續することが出来ずして、忽ち他のことに考へ移るの

である。學生の一大缺點は無學でなく、無識でもなく、不注意である。

不注意を退治する方法を講ずれば、自ら注意の力を養成することになる。以上の二種の不注意を救済する方法は矢張り各自の心懸による外はない。常に或る事物を明瞭に正確に透徹して考へることを努める。是に依つて第一種の不注意を救ふことが出来る。又一事物に就て思想を働かすときには、十分に之を了解するに至るまでは、半途で他の事物に心移さず、長く精神の力を一點に集注することを努めるのである。中學時代に於ても、注意深い學生と不注意な學生との別のあることは、誰れも認める所であらう。この注意深い者は、多くは自己の努力に依つて斯の如くなつたものである。中には自然に物に注意する天性の者もないではないが、今こゝに要求する所のものは學生自

身にその心懸、その努力に依つて有意の注意を益、發達せしむることである。かく注意力の養生を努むるときには一種の習慣となり、第二の天性となつて、後には格別の努力を要せずして、必要に應じ事物に注意することが出来るやうになる。之に反して一旦不注意の習慣が造り上げられると、如何に必要な場合にも、又如何に重大の事柄に對しても、十分に精神の作用を集注することが出来なくなる。その結果は推して知るべしである。

教師に依つて喚起される注意は任意の注意ではない。外界の刺戟若くは興味に依つて起る種類のものに屬する。而して學修上最も必要なる注意は前に陳べた通り任意の注意であつて、學生自身の奮勵に依らなければならぬ所のものである。教師は常に學生に向つて注意

すべしと云ふことを要求するが、斯の要求があるからとて、學生自身が自ら注意しようと思ふ必要のないときには何等の効のないことである。學生たる者よく注意の必要を悟つて、其の力を養成せんことを努めて居るであらうか。往々にしてこの點に就て十分の力を用ひざるの感がある。學修の効果を全うせんとすれば、大に此の點に重きを置かなければならぬ。

注意は何事を爲すにも必要である。今茲に主として述べるのは、學生は其の學修に注意すべしと云ふことである。學修は専ら學校で學ぶ所に存するから、學校の授業に注意すべしといふにある。先生の云ふ所は教科書にあると思つて、これに注意しない者は遂に不注意の人となる。自分の講讀することに注意するのみで、他の同級生の講讀に

不注意なるときは同じく不注意の習慣を作るに至る。平素學業に注意して居るものは試験前に一時に過度の勉強を爲す必要はない。但し試験前の勉強には精神が能く集中すると云ふことがあり、此の際に學業の一段の進歩を見ることはある。平素自分の行狀性行に注意して居るものは徳性の涵養上得る所が多い。

注意とは前にも云つた通り、長く繼續して精神の力を或る事に集中することである。又強く明に精神を集中することである。西洋學者の書いた勉強法や自修法に依ると、注意の効力は非常に大なるものであると説いてある。學者が大なる發見發明を爲したのも注意力の結果である。文學者が名文や名詩を作り出したのも此の力のお蔭であるといつて居る。同じく注意力といふのにも大小があつて、その大なる

注意力あるものは大事業を爲すのである。されば注意力があると云ふ上にも尙ほ大なる注意力を養はんことを努めることが必要である。

### 第八節 思考

善良なる教師は學生をして思考せしめ、その教授した知識を消化せしむるやうに指導するものである。唯、多く事實を教授し、學生の要求に應じて知識を授くる教師は、眞に善良なる教師と稱することは出来ぬ。教授されたことについて思考を費して始めて學修の實効が生ずる。如何なる種類の學校に於ても、その學科は少しとしない。一學科に於て授くる材料も甚だ多い。こゝに於て學生はこれらの學科に逐はれ、教師若くは教科書に就て知り得る所の知識材料を腦中に詰込む



決して賢  
なる能は  
ず。(ソ  
ンヨ)

學 修 法

六

に忙しくして、十分にそれらの事物知識に就て思考を費す邊がない感がある。しかるに單に腦中に詰込んだだけの知識は役に立たない。それは恰も辭書の中にある知識と同じである。學修して知識を修得するのは生きた百科辭書となるためではない。知識をして有效ならしむるためには、必ず教授された事柄に對して思考を加へなければならぬ。

世の中には物知りと稱せられる者がある。本讀みと唱へらるゝ者がある。多くの事柄を知つては居れど、纏まつた考がなく、一定の意見を立てることの出来ない人がある。斯の如きは唯、授けられた事柄を腦中に貯藏する許りで、即ち記憶するに止まつて思考することをしなからである。學修の目的は唯單に多く事物を知り多く知識を貯へ

學びて而

も思はざ  
れば、問  
く、思  
つて、而  
も、思  
はざれ  
ば、殆  
し。(孔  
子)

るためではない。知能を發達せしめ、徳性を涵養するにあるのである。固よりこの目的を達するためには、多くの知能がなければならぬ。併ながら單に知識を貯へるのみにては、知能を啓發することは出来ず、徳性を涵養することも出来ない。

或る學科に依つては必ず思考を要するものがある。その好むと好まざるとを問はず、思考を要するものがある。例へば數學の如き、何人も思考を費すにあらざれば、之を學んだと云ふことは出来ない。然るに斯の如き學科に就ても尙ほ單に記憶に訴へることを努めて、思考することゝを爲さない者がある。大なる誤である。或は記憶によることの多い學科、即ち語學の如き、歴史の如きものに於ても、決して單なる記憶のみに依つては、これが學修の目的は達せられるものでない。個々

の文字、個々の事實を知るのは、單純に記憶の力に依つて出来ることであるが、文字の關係を知り、一の事實と他の事實との關係を知らうとするには、決して記憶の力のみで出来るものではない、必ず推理即ち思考の力に依らなければならぬ。記憶は思考の材料を供給するものである。故に正當な判斷を下し、正當な推理を爲さんとするには、相當の記憶力がなければならぬ。とはいふまでもないが、さればとて材料ばかりではしかなかたがない。然るに動もすれば記憶さへすれば判斷推理の力を要せざるが如く思つて、専ら記憶に重きを置く傾きがある。是は現在の學生の通弊であらうと思ふ。記憶に依らうとすれば、唯、其の記憶せんとすることを反復すればよい。明瞭に理解するよりも、書物にある通りに記憶するのは、時間を要することも少いかも知れぬ。判

斷を爲し、推理を爲さんとしたならば、唯、反復するのみでは出来ない。或は書物を比較し、或は其の比較したるものを更に比較する等、錯雜なる精神の作用を要する。故に其の精神の力を要することも、單に數回反復して記憶するが如く容易ではない。それ故に學科の多岐に涉つて居る今日に於て、學生が専ら記憶の力に使つて、判斷推理、即ち思考の力を養はうとしないのは、幾分斟酌すべき事情がある。併ながら何事も思考するにあらざれば、學修の目的を達することは出来ぬとしたならば、學生たる者は常に注意して相當に思考することをしなければならぬ。

學修するといふことを以て多く記憶することのやうに考へるもののあるのは、確かに現時の一大弊であると思ふ。記憶することには中

中慾が深い、何でも成るべく多く記憶せんと劣める。成るほど記憶は學術上大切のものである、人間の精神の働きの内で肝要のものである。しかし記憶は思考の代りをするものではない。殊に考ふべきことを記憶しても、何の役にも立たない。即ち數學の説明の如きは如何に書物にある通りに記憶しても理解しなかつたならば役に立たない。且善き記憶は強き思考と伴はなければならぬ。文句のまよに覺える器械的暗誦的の記憶は善き記憶といふことは出来ない。

思考するといふことに就ても種々の程度がある。深く思考すると云ふことも、浅く思考すると云ふこともある。深く考へるのと、狭く考へるのと、の違ひがある。深く廣く思考すると云ふことに至つては界限のないことであるが、學生はその知識の範圍内に於て出来る限り廣く深く思考することにならぬ。かくて其の得たる所の知識は必要に應じて、其の用をなすやうになる。又斯くて世に所謂常識なるものが養はれることになる。世に處するに當つて如何に多くの事物を知つて居るも、常識がないときには活用をなすことが出来ない。殊に普通教育の目的は、専ら常識を養ふにあると言つても宜い位であるが、此の常識は廣く且つ深く思考することに依つて養はれるのである。單に一科の學術を修めるばかりでは常識を得ることは出来ず、又アマリ淺く、唯、單に廣く種々のことを學ぶも常識を得ることは出来ない。學生たる者は、唯、學校に於て學ぶ所を記憶せんとのみ努めずして、其の學んだ所に就て正當の判斷推理をなすやうに至らんことを期せねばならぬ。

思慮人よ  
り高きこ  
と一等な  
れば、便  
ち一等の  
人なり。  
洲(雨森芳







擇ぶ其の精  
は其の精  
しきを藤  
す。佐藤  
仁齋。固  
書は固よ  
り。道に  
り。の具  
ど。も然  
知。ら。博  
て。泛。則  
覽。せ。ば  
德。壞。れ  
悪。亦。ゆ  
呼。亦。己  
亂。る。世  
け。ま。ざ  
齊。大。ん  
其。齋。大  
其。齋。大

學 修 法

人と。しては、之を通讀するのは必要のこと、云はねばならぬ。歴史に就て言へば、學校の教科書として今日は日本外史や十八史略を用ひることは出來ぬ。これは疑のないことである。併ながら教育ある日本人として、又東洋人としては是等の者を通讀する必要がある。又國語に就ても、學校に所定の教科書があつて、必要なる國語國文の一斑は其の教科書の中に網羅されて居るのであるが、單にそのみを以て止めたならばその知識は決して十分であると云ふことは出來ない。古來何人でも通讀する値打のあるもの、例へば徒然草の如き、神皇正統記の如き、太平記の如き、その他幾多の書物にして研究する値打のあるものは、餘力の許す限り講讀する必要がある。要するに書物の選擇に就ては大に注意することが肝要である。

は。人。生。の  
最。良。な。る  
強。に。思。て  
最。良。の。藏  
想。を。秘。し  
す。る。も。の  
なり。スマ  
ル。ス。イ  
長。書。は  
存。後。に  
て。後。に  
傳。へ。ら  
が。貴。重。な  
る。生。血。な  
り。ミ。ル  
ト。ン。ミ  
出。で。て  
年。を。経  
る。新。著  
れ。む。エ  
マ

之を概論すれば、新刊の書物よりも古き書物を讀むことを勧めたい。何れの學科に就ても標準となるべき書物は少しとしない。これらの標準となるやうな書物を選んで讀んだならば利益があつて害はない。若し新奇を喜び、今日出でて明日は忽ち高閣に束ねらるゝが如きものを見んとしたならば、古來より標準とせられたる書物を見る時間がなくなるのみならず、格別の利益を得ずして却つて害があることもある。尙ほ讀書については世間に讀書法なるものがある。参考すれば益する所が少くなくあらう。

予は前に學生は全力を學校の課業に注がなければならぬと云うた。實にかく云うた、又實にかく信ずる。學校の課業のみを修めて既に餘力なしとすれば已むを得ない、學校の課業を犠牲にしてまでも他に讀





方法であるとしたならば、我々は此の方法を顧みざるの甚だしきものである。

この観察の力を養ふことは學修の上に於て非常に有益なることであるとするれば、如何にして之を養ふを得るかといふことが當面の問題となつて来る。博物學科の如きは殆んどこの観察に依つて研究すると言つても宜いのである。隨て博物學は此の力を養ふ上に最も適當の學科である。物理化學も、事物の真相を間違なく觀察すると云ふことが、其の學科の基礎になるのであるから、正確に此等の學科を修めるのは觀察力を養ふ所以である。かく學科を修むることに依つて此の力を養ふこともあるが、如何にして觀察の力を養成すべきかと云ふに、是れ亦各自の注意すると注意せざるとに依るのである。他に名案は

ない。

我國に於ては古來自然學科に關する研究が比較的に等閑視されてをつた爲に、事物の真相を看取すると云ふ此の觀察力に注意する者が少なかつた。この餘弊は今日の學生にも及んで居るやうである。讀書の必要は早くから認められたが、觀察を以て左程必要のものと考えなかつた。西洋の多くの學者が説くが如く、實に觀察は其の必要の度に於ては讀書と異なるものではない。尙ほ觀察は單に知識の材料を得るばかりでなく、徳性の涵養上に於ても、その効果は少しとしない。我々路傍に於て不體裁の舉動をなす者を見ることは少しとしない。是は自己に反省する好材料ではないか。或は他人の悲喜哀樂の狀を見ることは往々にしてある。是亦自己の徳性修養の資料とすること

が出来るのである。立派な品格ある人とは常に見聞する事物に因り自家の修養を怠らないものに外ならぬのである。

### 第十一節 新聞雜誌及小説

今日學校所定の學科は、その中學校たると、高等女學校たると、師範學校たると、將た實業學校たると、其の他何種の學校たるとを問はず、其の科目は甚だ多い。若し減じ得べくんば學科の數を減じて、一には學生の負擔を軽くし、一にはその思想の統一と正確とを圖りたいと思ふ。世人も往々今日の學課目の繁多なることを訴へて居るが、一應尤のことである。然るに如何なる學科を削減すべきか、深く之を研究するときには、甚だ選擇に苦しみ何れの學科も必要にして、其の一をも割愛す

ることが出来ない。更に一方よりは、尙ほ學校に向つて必要なる學科を増加すべしとの要求が、年と共に強くなつて來る。それ故に近年の趨勢を見るに學校の學科は増加することあるも減ずることはない。又學科の數ばかりでなく、その程度も高くなるも低くなることはない。然らば今日課程の多岐に涉り、高尚に赴くと云ふことは、寔に已むを得ざるに出づるのである。こゝに於て學生たる者は、益學修の方法を誤らず、至大の注意を以てその思想界の滅裂に陥らざること、知識の散漫に流れることを避けなければならぬ。

斯の如き事情の下に在る今日の學生たるもの、何の邊があつて、新聞雜誌を顧みることが出来ようか。世の中に出で事をなすものに取つては新聞は必要缺くべからざるものである。新聞を見ずして世に處

せんとするは一日たりとも得べからざることである。新聞の社會に効能のあることは別に言ふまでもない。併ながら學修の時期にある所の學生に取つては新聞は必ずしも必要ではない。餘裕があつて之を讀むは妨げないとしても、前に述べた如く、今日の學生は殆ど餘裕がないのである。餘裕がないとすれば新聞雜誌を見ないのが當然である。餘裕がないのに尙ほ新聞雜誌を見るのは有害であると斷言せざるを得ない。よし新聞雜誌そのものは有害でなくても、之を讀むために、當然の仕事たる學校の正課を侵蝕するに至るのは有害である。新聞雜誌を正課の學科と同視することの出来ないのは云ふまでもない。新聞雜誌は日々社會に生ずる出來事を報道論議するものである。新聞雜誌が學生の學修に必要なやうな事を掲げて居つたなら、新聞雜誌

たるの効用はない。既に新聞雜誌は正課と異り、而して學生は幾んど餘裕がないとすれば、新聞雜誌を讀むのは正課を害するものと云はざるを得ない。故に嚴格に云へば學生は一の新聞をも見るを要せぬと主張したいと思ふ。然るに實際に於ては何れの家庭に於ても、一二の新聞を有せざるはない。故に之を絶対に學生に禁ずると云ふことは事情困難なることである。殊に新聞に記する所のことは、學生が之を見ても興味を感ずることがあるからして禁ぜんとしても禁ずることは困難である。予はそれ故に成るべく少く新聞雜誌を見ることを勧めるのである。既に世の中に出た者は、單に一種の新聞を見るのみでは満足することの出来ない場合が多からうけれども、學生の如きは成るべく少きを可とする。

又新聞に記載することには、或は小説あり、或は政治上のことあり、或は實業上のことがあつて、悉く通覽する必要のないのは勿論である。僅に世上の出來事を一瞥すれば足れりと思ふ。所謂三面記事に至つては之を顧みない習慣を造ることを望む。社會百般のことを報道する記事の内にも事實を誤るものが少くないから、輕々しく信ずることはよくない。學修の時期は土臺を造りつゝある時期である。他日その基礎の上に飛躍を試み、活動をなすことを期する時期である。この時代に於ては専ら基礎的の知識、根本的の素養をなすべきである。學生は時事問題に迂なることを厭はない。學生の生活は將來の社會に存して、現時の社會ではない。よし學生が新聞雜誌に依つて時事問題の大體に通ずることがあつても、適當に之を判斷する十分の基礎素

養を有して居るとは云へない。即ち時事問題の一通りの經過を知ると云ふが如きは實は學生に取つて何等の必要のないことである。若し學生にして時事問題に關する意見を立てることがあるとしても、言はゞ出來合の意見にして深く講究して立てたものとは云へない。堅い基礎、深い根據の上に立てられたものでない。

今日新聞雜誌の普及したる結果として、老少男女を問はず、之を讀んで時事を知らなければならぬ如く、何となく考へるに至つたけれども、是は現代の弊と言はなければならぬ。言ふまでもなく新聞雜誌には、學生に必要な根本的、基礎的の事實知識を記することは幾んどなく、多くは日々發生する事件である。既に社會に立てる者は其の大體に通ずるを要するけれども、今日現に世に立つにあらず、將來數年の後に

於て世の中に出でんとする者には必要がないのである。單に必要なばかりでなく、先に述べた如く學生の腦髓は基礎的の學科を修むるが爲に殆ど忙殺されて居るのであるから、常に注意をなさなければ思想の統一を失ふ恐がある場合である。然るに錯雜なる社會の出來事に幾分の精神力を割いて思想界の錯亂を來さんとするが如きは、百弊あつて一利ないものと言はなければならぬ。特に現在の新聞雜誌は遺憾ながら、その調子の甚だ低いものである。されば道德上には大に警戒を要する。

今日青年の爲に編輯する所の雜誌が少くない。是等は往々にして有益なる材料を含んでは居るけれども、成るべく多く讀者の喜ぶ所とならんことを欲し、興味を起すを主とするために、好奇心に投じ、人の弱

點に乗するやうな記事が少くない。それ故に斯の如き青年雜誌は、その中に有益なる材料を含むに拘はらず、予は之を青年に推奨するの勇氣を缺くのである。

要するに新聞雜誌は成るべく之を避けんことを希望するのである。今日學生に對して深く同情を寄する所の世の識者教育家は、悉く予と同一の希望を以て居ると信ずる。然るに學校に於て新聞雜誌等の購讀を禁ずる場合に於ては、世人はその學校教員を以て狹隘なる僻見を有する者として斥ける。或は文學の趣味を解せざる道學先生の類として擯斥する。甚だしきは思想の自由を制限するものと非難する。而して世の中には斯の如き攻撃反對を受くるを氣にする教育者もある。併ながら其の衷心を察するときには、恐くはこゝに述べたる意見

と同一の考を以て居ると思ふ。而して斯の如き考を爲すのは果して自家の僻見よりするのであるか、或は青年をして學修時代には専心基礎的の素養を作るために從事せしめんとする眞に學生に向つて有する同情より發するものであるか、何れであらう。予は今學生に向つて敢て時事に迂なることを意とせざる勇氣を起すことを勸むる者である。而してこれ全く學生の前途に多大なる希望を屬するよりいふのである。

次に小説に就て言はん、小説は青年に對して弊害のみあつて利益はないと信ずる。予は小説を以て、本來有害なりとして絶對にその必要を認めないのである。既に學修の時期を過ぎた大人が、小説に依つて娛樂を取るのは、決して非難すべきではない。小説の文學上の價

値は之を認めるものである。予のことに言ふのは、青年に向つて小説を読むべからずと云ふのであつて、何人も小説を読むべからずと云ふのではない。學修の時期を経過したる以上は小説を好む者は之に耽るも差支へない。學生時代に小説を読んで利益のあることは決してないと云ふのである。よし多少の利益はあるとしても、初めに述べた如く、今日の學生は何れも基礎的の學科に忙殺されて居るものである。而して前節に述べた如く、餘力餘暇を以て古來標準と見なされた書物を読む必要もあるのである。何の邊あつて小説のために時間を費すことが出来るであらうか。殊に今日の小説は識者の指彈するが如く極めて不健全なるものが多いのである。不健全ならざるものすら、小説は學生にとりて害あつて益がない、況やその不健全なるものに於て

をやである。苟も青年の將來を思ふ者は、何人も其小説を讀まざらんことを欲せざるものはない。唯之を禁ぜんと欲するも其の目的を達することの難きを恐れるのである。學生自身に之を讀まざらんと決心なき以上は、父兄師長も之を如何ともすることは出来ない。予は直接に世の學生に訴へて自ら小説を讀まざるべしとの決心を爲さんことを切望する。若し小説も善良なるものを選んで讀むときには害がないと云ふならば、それは不通の論である。如何にしてその善良なるものを選びべきかは、容易に決定さるべきことではない。

或は學生と雖も娛樂の爲めに小説を讀む必要があると云ふ者があ  
るが、是も亦誤つた考である。元來、學生時代に於ては、總てのことが娛  
樂であると見ることが出来る。學校に於て學科を學ぶことも、體操を

するものも、諸般の遊戯をするものも、總て娛樂ならぬものはない。恰も二  
三歳の兒童にありては一舉手一投足悉く娛樂であつて、これらの兒童  
のためには特に娛樂を供する必要なきが如きものである。若し學生  
が學業に勉勵し、その品性を磨くが如きことを以て、一種の苦痛の如く  
に考へるならば、それは誤つたことである。今日一の新しい事實を習う  
たならば、學生は一の愉快を感じるであらう。一の問題を解釋するこ  
とを得たならば、又精神上の大なる樂みを覺えるであらう。學生はそ  
の學修全體を以て娛樂とすべきである。又是を以て娛樂なりと考へ  
たならば、必ずその意味の誤まらざることを悟るであらう。然らば娛  
樂のために小説を見ると云ふことは、學生に對しては毫もその必要は  
ないのである。

小説は文學上の贅澤品である、裝飾品である、嗜好品である、なくてはならぬものと云ふことは出来ない。小説は人生の真相を穿つものであると云ふ者がある、小説家自身の我田引水論である。これ等の點は今茲に議論する必要はない。坪内博士は我國に於ける一大小説家であるが、その近著「倫理と文學」に於て、小説が人生の真相を明にするものであると云ふ説を論じて、其の然らざることを證せられて居る。尙ほその書物の中に小説を読むについての注意を懇切に述べてある。それは近代の小説は餘程注意して讀まなければ大に害があるからである。又博士は青年に小説を読むなと云はない、それは云つても無益であるから云はないのであると述べて居られる。即ち讀むなと云つて、それが行はれるなら讀むなと云はれる趣旨であるやうである。兎に角博

士は小説を読むには種々の注意が必要であると云つて、親切にその注意すべき要點を擧げて居られる。萬一小説を讀むことの禁じられなものは、是非倫理と文學中の今の小説を讀む人のためにと云ふ一篇を熟讀して博士の指導の下に讀むことを勧める。此の中にあるやうな注意警戒を爲しつゝ小説を讀むなら、予も敢て小説を讀むことの害を云はない。併し博士の望まれるやうな注意を以て、小説即ち娛樂のために讀む小説を看るものは少なからう。斯の如く注意用心を要する如きものは、初より遠ざけて近づけないのがよい。

元來予の小説を讀むことに反對する大なる理由は小説のよしあしよりは學修の爲に餘力餘暇のない者が小説を讀むの非を鳴らすのである。小説は學修の爲に全力を捧げて居る時代に讀むべきものでな



い。まして今日は學修の正課たる學科の荷が中々重い、或は重きに過ぎて居る、その種類が非常に多い、思想の明確統一は大に迫害を受けて居る、此の際に更に小説を看て幾分の重さを加へ、思想の錯亂を來すのを恐れるのである。小説には何等の警戒すべきことがないにしても讀まない方がよい。まして注意を加ふるの必要あるに於てをやである。學校で禁じなくても、先生が咎めなくても、學生たるもの自ら進んで自ら禁すべきである。少くとも學修しつゝある間は禁すべきである。小説は青年の時から讀み習はなければならぬと云ふものでは決してない。之に反して學校の學科は青年の時代に修めなければならぬ、修めて不十分であつてはならぬ。

### 第三章 知識の修得

#### 第一節 授業と學修

前章に於て學修の總則とも云ふべきものを述べた。そは知識の修得の上にも、徳性の涵養の上にも共に適用さるべきものである。云ふまでもないが、學修法は理論を主とするものではない、實行を主とするものである。知識の修得のためにも、前章に述べた所のことをも、成るべく嚴格に實行しなければならぬ。本章に於ては専ら知識の修得上のことを論ずる。知識の修得のためには彼と此と共に實行しなければならぬ。

授業と云ふのは教師の側より云ふのである、生徒の側より云へば受

業である。受業といふと受働的に聞える。自働的の意味で云はうとすれば學修と云ふ外はない。こゝには學修を専ら知識の修得上の働きとして解する。

教師が教場に臨むには、必ず豫めその授けんとする所のことについて準備をなすのを常とする。學生が授業を受けるには何等の用意を要せぬのであらうか。學科に依ては豫修をなすこともあるが、たとひ豫修を要せぬ學科でも、すべて學生たるものは何等かの準備を爲す必要がないであらうか。授業は必ず學修即ち自發的奮勵と相俟たなければ、其の効果がなまいといふことは、既に幾度か繰返して説いた。たとひ教師の業を受くることがないにしても、自ら修め獨りで學ぶと云ふことがあつて學修は授業を離れても出来るのである。然るに授業の

みあつて學修が伴はなかつたときは、授業の効果がなないのである。教師が學業を授くるに當つて、學生たるものが單に之を受くるのみであつたならば、丁度教師の授けんとして居ることを蓄音器に吹込んだ如きものである。これでは教育と稱することは出来ぬ。學修と云ふことは出来ない。單に教師が授けたるまゝ保存するのは蓄音器と何等の擇ぶ所がない。故に學生が教場に臨むに當つては、大に活潑にその精神を働かしめなければならぬ。

第一には教場に臨んだときには、活潑なる勇氣を以て精神を満たさなければならぬ。今日は如何なる知識を學修すべきか、如何なることを了解すべきか、如何に既得の知識界を擴張すべきか、今日までの思想の系統を如何に整頓すべきか。かく大なる希望と樂みとを以て教場

に臨むことが必要である。恰も教師が學生の思想界を擴張し、整頓せんとするの希望をもつて教室に臨むが如く、學生の側に於ても大に豫期する所がなければならぬ。若し唯茫然と教室に臨むのに止まつたならば、良教師が如何に巧みな教授をなしても學生の得る所はない、よしあつても値打のないものたるを免れない。今日學生は如何なる希望、如何なる豫期をもつて日々教室に臨んで居るであらうか。止むことを得ず教室に臨むと云ふが如きものはないであらうか。甚だしきはいやく、教室に臨むものもあるではないか。此の如きは學修の第一著を誤るものである。

授業と云ひ、學修と云ひ、共に教師と學生との二者が知識の増進のために、智力の練習のために、大きく云へば真理の研究のために、一緒に精神を働かすことである。教師のみ働いて學生が働かなくても行かず、學生のみ働いて教師がほんやりして居つても行かない。理想的のこゝとを云へば兩者の氣合が一致して居らねばならぬ。今日の學校授業の有様を見れば、教師は兎に角働いて居る、或る場合には不十分に感ずることもないではないが、相當に準備して來、又相當に働いて居る。然るに學生はほんやりして居るものが少くない、學生の側には何等の準備なく、何等の意氣込がない。かくの如き有様では教師の働き甲斐なく、學修の効果、授業の効果も少ない。學生は唯、靜肅に教師の講釋を聞いて居りさへすればよいと思ふのは間違である。身體は靜肅であつても、濫りに言語舉動を爲さずとも、心の内は活潑でなければならぬ。第二には授業時間中に於ては斷えず十分に注意し、その記憶に訴ふ

學ぶこと  
及ばざる  
が如く  
し、猶ほ  
之を失は  
んことを  
恐る。  
(孔子)

學修法  
べきは之を記憶し判断推理に訴ふべきは之に訴へ、腦中は活潑に働いて居るやうでなければならぬ。即ち授業時間は業を受けるときにあらずして、自發的奮勵をもつて學修しつゝあると云ふ状態でなければならぬ。此の如くなるときは授業に對して必ず大に興味を感じるに至る。然るに何等の希望なく、いや／＼授業時間の終るを待つが如き有様を以てしては、授業について何等の興味を感じざるのみならず、甚だ苦しく一時間を過ぎさなければならぬ。教師の側より云へば學生をして成るべく多く働かしめる。これは教授上の秘訣である。學生の側より云へば教師の誘導をまたず自ら進んで活潑に精神の働をなすべきである。元來學校の授業時間は精神の最も活潑なるべき午前より午後にかけて定めてあつて、一晝夜の中で最も大切なる時間であ

る。然るにこの最も大切なる時間を嫌惡の情を以て経過するが如きは愚の極である。授業時間中單に注意して教師の云ふ處を聽くのみであつたならば、この最も利益なるべき時間を十分利用せざる譏を免れない。學校より歸宅した後、勉強すると云ふのは勉強の好時機を誤るものである。勉強は教室に居る間に、教師の業を受けて居る間に、最も活潑に最も有益になさなければならぬ。學校の授業時間は學生が教師の助をかりつゝ勉強する時間であつて、最も有効な勉強時間である。授業時間と勉強時間を別々に見るのは間違つて居る。然るに今日の學生の多くは、學校の授業時間と勉強時間を區別して考へて居りはしまいか。希望をもつて教場に臨み、授業中常に活潑に精神を働かすものは、眞に有効の勉強をして居るものである。勉強は授業時

間の外にもする必要があるけれども、最も有効な勉強は授業時間中に爲す勉強である。

### 第二節 明瞭正確の知識

教師の講義を聽いて之を筆記し、若くは教科書を解するを得るを以て満足する者が多い。而して教師の講義を解し、教科書を解すると云ふのも、眞に明瞭に且つ正確に解するのならばよいけれども、唯、了解し得たやうな漠然たる感を以て満足する場合は少くない。知識は明瞭にして正確でなければならぬ。若し明瞭正確を缺いて居るならば、是は眞の知識と稱することは出来ない。又今日得る處の知識は將來の進歩の基礎となるものでなければならぬ。漠然たる知識は不安固な

る基礎の如きもので、確實なる知識の土臺となることは出来ない。又修め得たる知識を必要に應じて應用することは、明瞭正確でなければ出来ぬのである。故に學校に於て學修する處の知識は明瞭正確を缺くやうなことがあつてはならぬ。この明確の知識を得んとするには、教師の講義を十分注意して聽くことも必要である。これを聽いて苟も了解し難き處、或は明瞭正確ならざる處は飽くまでもこれを質問することをしてしなければならぬ。又單に教師を便るばかりでなく、自ら思考し或は復習することをしてしなければならぬ。要するに修得したる知識はあらゆる手段を盡して、これを明瞭に正確にしなければならぬ。然るに往々極めて漠然たる知識を得て満足するが如きものがある。一知半解の知識を以て足れりとするところがある。これは最も注意し

て避けなければならぬ。殊に前に述べた如く學校に於て學修したことは他日の發展の基礎となるべきものであるから、全力を盡してその基礎を十分鞏固に築かなければならぬ。漠然たる知識は他日活社會に立つときの鞏固な基礎となることは出来ない。

明瞭正確なる知識を得るに至らず、漠然たる理解を以て満足すると云ふことは我が國人を通じての短所である。我が國民は概して敏捷であり、伶俐である。それ故に一を聽いて二を知るが如き風がある。これは甚だ嘉すべきことであるけれども、伶俐なるものは往々明瞭正確に知らざること、どうか、かつかごまかすことが出来る。しかしごまかしは何時かほろを出すものである。又ごまかしの知識は堅固な基礎となることは出来ない。されば漠然たる曖昧なる了解を以て足

れりとすることは實に恐るべきことで、大に發展の障礙をなすものである。又我が國人の弊として、従つて學生の風として、徒らに高尚なものと深遠なこと、新規なことを學ぼうとする風がある。明瞭に正確に知るよりも多く、廣く、且高きことを知らんとする風がある。これは甚だ注意すべき弊風であると信ずる。果して高尚なものと深遠なことを明確に知り得るならば、決して非とすべきではないが、卑近なことも、普通なことに就て明瞭正確に知るは一層必要である。高尚なことも、深遠なことも、土臺があれば之を知ることがは難くはない。普通一般のことを正確に知らずして、一足飛びに高尚なものと、深遠なことを知らうとするのは間違つたことである。よし高尚深遠のことを聞いても決して十分に了解することが出来るものでない。極めて漠然たる所謂一知半

解の知識を得るに止まるものである。然るに此の弊は中學校と云はず、高等女學校と云はず、上は大學に至るまで侵蝕して居る。學生たるもの大に猛省しなければならぬ。

予は學生に向つてその修得した知識が能く成熟したるものならんことを望むのである。而してこれが爲めには復習をなすを以て最も必要な方法とするのである。復習は既得の知識を記憶して忘却しない爲にばかりするのではない。知識の能く成熟する爲にも必要である。希望を云へば日々その前日に得た處のことを復習するやうにありたい。一週の終りにはその週に於て修得した知識を十分に復習し、毎月の終り、毎學期、毎學年何れもその終りに於てよく復習せんことを希望して止まない。此の如くなれば明瞭な正確の知識を得ることが

學びて而して時に習ふに  
之を習ふに  
亦か  
や。ら  
（孔子）

出來、知識が練れて來ると思ふ。この復習のことは決して試験のためや、その成績をよくせんが爲めに云ふのではない。學修したる知識を明瞭にし、正確にし、以て熟したる、練れたるものたらしめんがために云ふのである。更に換言すれば知識の土臺を鞏固にせんがために云ふのである。

### 第三節 系統的の知識

知識は個々に明瞭正確であるばかりでなく、相互の間に系統聯絡のあるものでなければならぬ。我々の精神界は統一されたものでなければならぬ。唯、種々雜多の知識が蓄積されて、その間に系統聯絡のないものであつてはならない。世には色々のことを知つて居るが、纏つ

た考のないものがある。筋道の立つた意見を述べることの出来ないものがある。此等は即ち系統的の知識のない者である。知識に聯絡あることの肝要なるは別に喋々を須たない。然るに其の聯絡系統は自ら具はるものではない。努めて求めなければならぬものである。

前節に述べた復習の如きも、知識の聯絡を求むる考を以てなすべきである。大抵の知識は他の知識と聯絡統一されて初めて明瞭正確になるものである。故に前節に主張したる明瞭正確の知識を期する爲にも聯絡統一は必要である。試験前の勉強も之を利用して、一學期或は一學年間に修得したる知識の間に聯絡をつけ、系統を立てるときには大なる利益がある。然るに實際を見るに個々の知識を成るべく多く記憶せんと欲して、その間の聯絡關係の如きは之を顧みないものが

ある。試験の問題に出さうなものを擇んで個々別々に記憶せんと努むるが如き者も少くない。例へば英語に於て専ら難句集を勉強して連續せる文章を理解することを忽にする如きである。數學に於ても同様である。これ等の用に供せんが爲めに特に編纂せられた書物すらあると云ふことである。此の如き問題集の如きものゝみを研究して居るときは、或は個々の知識は得るかも知れぬけれども、系統ある知識を得ることは決して出来ない。予は教師の默立のみを以て満足せずして、學生自ら知識相互の間に聯絡系統を立てると云ふことに心懸けるやうにありたいと思ふ。

系統聯絡を作るに就て、その系統聯絡すべき知識や思想が多いときには、それだけ困難である。少ない知識の間に聯絡を作るといふこと



は比較的容易である。今日學生が學校で學ぶ所は前にも述べた如く多岐に涉つて居り、その程度も低しとしない。即ち以て聯絡さるべき知識は少くない。しかし最も必要なる基礎的のものであるとしたならば、これを省くことは出来ない。唯、茲に出来ることは學修する學科以外に、他の知識を食らないことである。前章に良書を選択する必要を説き、新聞雜誌小説を排したのも、亦此の意味から一層道理のあることが發見されると信ずる。雜書を漫讀したり、新聞雜誌小説等を看るときには思想の統一を害し、知識の聯絡を妨げる恐がある。

#### 第四節 學科に對する趣味

明瞭正確に了解し、その了解したる知識の間に聯絡系統あるときは、

何人も之に向つて趣味を感じるものである。或る學科に對して趣味を感じないと云ふのは、即ちこれを了解しないからである。或は了解しても明瞭正確でないからである。諺に好きこそ物の上手なれと云ふことがあるが、又上手こそ物の好きなれである。

中等程度の學校に於て授くる所の學科は、其の種類が頗る多い。此等數多の學科に對して學生は成るべく同一の趣味を有するやうにしたい。將來取る處の業務は各専門分科的であることは明かである。世の進歩に伴つて分業は益々進み今日一人の爲すことも、明日は分れて二人で之を爲し、更に數多の分科に分かれる。併ながらその専門の學問又は業務の基礎は狹隘であつてはならぬ。成るべく廣きことを要する。即ち何人も成るべく完全なる普通教育を要する。この完全な

る普通教育を基礎として、その上に専門の學科技術を修むべきである。高尙な専門的の仕事になさうとする者ほど完全なる普通教育を受けなければならぬ。普通教育はかくの如く何人にも必要なものである。

普通教育の時代に於ては學生は各學科に對して好き嫌ひをなさず、成るべく平等に趣味を有するやうにしなければならぬ。如何にしたなら趣味を有するやうになるか。勉めて學修し、明瞭正確に了解する。ときには自然趣味を感じる。趣味を感じて學ぶときは益、進歩し、進歩するに従つて愈々趣味を感じるのである。

少年のときに早く將來の専門を一定する者もある。これは好ましいことではない。殊に將來の専門に關係が少いとて、或る學科を嫌ふ

事に於て  
厭倦する  
は皆是れ  
誠なき處  
なり。  
(程伊川)

が如きことがあらば尙更のことである。趣味は人の天稟に由るが如くあるけれども、初めは大に嫌思したのも、後には之を好むやうになることのあるのは人の常に實驗する所である。初め好んだものも、後に嫌ふやうになることもある。食はず嫌ひといふことは食物ばかりではない。嫌ひだと思ひ續けるときは、遂に眞に嫌ひになる。學科に對する好惡も之に類するものがある。中等學校時代で或る學科が嫌ひだといふのは所謂食はず嫌ひである。勉強が足らず、十分に理解せられないから、面白くないのである。初に嫌と思はれた學科も努めて勉強してよく理解するときは、趣味の泉の混々として湧き、來るものがある。つて、初に嫌つたのが怪しまれるやうになる。

學校の課程として定められたものは、偶然斯く定められたのではな

い。數多の學者が研究した結果や多年の經驗を積んだ結果である。學修中の者が之に對して好惡の意見を立てるのは誤つたことであらう。又その課程に深い根據のあるなしは別として、既に課程として定まつた以上は、之を好まないとても學ばなければならぬ。而して興味を有たずして學ぶときは勉強は一種の苦痛である、且その得る處も自ら少い。然らばあらゆる努力を以て學科に興味を有することを勉め、興味を感じるに至らなければならぬ。

若し夫れ試験に及第するを程度として勉強するに至つては、學修の目的を達する所以でない。十分の趣味を以て學科に對するときは試験の成績の如き自ら優良となる。又學科に興味を感じるが故に勉強すると云ふのは高尚のことである、試験のためにするのは餘り立派

なこと、云へない。

尙ほ少し參考のために普通學の必要のことを一言したい。社會に出で後に主として役に立つものは専門の學科であつて、高尚な深遠な學科ほど多く役に立つ。學校で云へば大學で修めた學科が最も高くもあり、又最も深い。しかるに此の學科は初より専門に修むるのではない。大學の教育を受けるには最も廣い普通學科の準備を要する、即ち普通學科のために最も長き年月を要する。例を取つて云へば醫科大學で醫學の専門教育を施すにも四ヶ年であり、醫學専門學校で醫學の専門教育を施すにも四年を要する。即ち専門教育の年限は大學でも醫學専門學校でも同様であるが、其の學修の結果は大變に違ふ。その違ひは主として普通學の方にあつて、専門教育の方ではない。一は

中學校から直に専門教育を修め、一は中學校の上に更に三年間普通教育を修めて後始めて専門教育を受ける。これに依て見ても普通學科の如何に必要であるか、わかる。此の重要な普通學科は最も眞面目に之を修め、確實に之を理解しなければならぬ。而してかくするには普通學科に對して趣味を有たなければならぬ。

### 第五節 諸學科に就いて

教授法に各學科の教授法があるが如く、學修法に於ても亦各學科に就て特異なる點を心得る必要がある。茲には單に二三の學科に就て一二の注意を喚起するにとゞめて置き、他の學科に就いては學生の研究と類推とに譲らう。

修身科は今日中等程度の學校に於ては、皆之を設けて居る。學校教育の目的より之を云ふ時は、修身科は最も重要な學科である。されば教育者の間に於ては修身科に關して比較的多くの研究がある。之を教授する者は校長か首席教師である。然るに衆論は修身科の効力が最も少いと云ふことに歸して居る。然らばその原因はどこにあるか。予はその大なる原因は學生が修身科を重要視せぬ處に存すると思ふ。學校に於ても亦立法の精神に於ても修身科を最も重視するに拘らず、學生獨りこれを以て餘り重要な學科と見て居らないと云ふのは、今日の現状ではあるまいか。教育の目的即ち學修の目的は徳性の涵養にあると云うても宜い。修身科の重要であると云ふことは明なることである。唯、修身科に於て授ける處は、新規なることは少ない。

理解の餘り困難なことはない。善を行ふべしと云ひ、惡を行ふべからずと説き、善の何たる、惡の何たるに至つては、學生の大體辨知する所の事柄である。修身の上のことで困難なる點は、理解する點にあらずして、實行の邊にあるのである。所謂三歳の兒童も之を云ふは易く、白髮の老翁も之を行ふは難しといふ點にある。知り難き解し難き學科を以て重大なるものと爲し、之を知り之を解するに於て容易なる修身科を輕視するのは今日の學生の通弊である。修身のことは知り易いが重要のものである、行ひ難いが輕視すべきものではない。

學科の重要なものは、其の高尙の程度如何によるものではない。了解の難易によるものでもない。修身科は自己の修養上最も必要で、又重要な學科たるを體認しなければならぬ。修身科に於て學びたる知

識は實踐躬行以てこれを行爲に表さんことを心懸けなければならぬ。かく觀じ來るときには、修身科は最も困難のもので、隨つて熱誠を以て之に對せなくてはならぬことになる。かくて修身の目的も達せられるであらう。

次に國語・漢文に就て一言すれば、この學科も大抵の學校にある所のものである。封建時代に於ては學問といへば、修身の外は殆ど詩歌文章を學ぶにあつたのである。即ち國語・漢文が主要なる者であつた。歐羅巴に於ても自國の言語並に古代の文學は最も重要な學科とせられたのである。即ち以前は我も彼も此の學科に全力を注いで居つた。此の學科はそれほど大切なる學科であつた。然るに今日は新に幾多の必要な學科を學ばなければならぬ時代になつた。こゝに於

て國語漢文に全力を盡すことは出來ない。眞に止むを得ないことである。即ちその結果であらうか國語漢文の成績は甚だ不良であると云はれて居る。元來語學に習熟するには反復熟讀して、時には暗誦しなければならぬ。即ち語學の大部分は記憶に訴へるものである。然るに今日學生の國語漢文を學ぶを見るに或は書物に書き入れをし、或は假名を附して以て足れりとなし、反復して記憶を堅くすることを努めない。その結果として言語文字の記憶は甚だ憐れなもので、頗る不確實なるものである。如何なる學科を學ぶにも自發的奮勵を要するものであるが、今日の學生は國語漢文に就ては多く註釋の書物に依つて、成るべく容易にこれを讀み、成るべく容易に之を解することを專一とする。此の如く容易に得たることは容易に失ふこととなるは當

然である。又確實に文字の意味を了解するためには辭書を用ひなければならぬ。同一の文字熟語に就て屢辭書を用ひることに依つて、初めて確實にこれを記憶するに至るのである。然るに辭書を用ひる勞を避けて、只管簡單に學ぶことを心懸けて、多少の奮勵努力もなすことを惜むやうな風がある。國語漢文の成績が甚だ佳良ならずと云はれるのも當然である。學生たる者註釋等の助けを頼まず自己と教師と辭書とを頼んで一層の努力を此の學科に用ひることを希望する。尙ほ一つの注意すべきは學校に於て講讀する國語漢文だけであつては、その分量が甚だ不足であるから、餘暇を以て自修する覺悟が極めて肝要であることである。前に述べた如く、日本外史、十八史略、文章軌範等の標準的書物は、是非一讀するやうにしたい。徒然草、太平記等は之を

讀んで面白い上に國語の補助として大なる裨益がある。

この學科に因みて作文のことに就て一言しよう。今日の學校に於ては作文を課することが極めて少ない。これは眞に已むを得ざることであつて、作文を多く課して、これを添削して學生に示すことは容易なことでない。それで已むことを得ず作文を課する數を少くするのである。作文の目的を達するに、それを以て十分とするのではない。故に出來得る限り自ら文を作ることとを勉めなければならぬ。日記を記するが如き、旅行した時にその見聞したことを記するが如き、或は折に觸れて所感を記するが如き、作文の機會は少くなからうと思ふのである。學校に於て課する作文に就ては、單に自己の添削に注意するのみならず、學友の作文に就ても常に注意を怠らぬことが必要である。

彼の教師の骨折つて添削したる自己の作文にすら、十分の注意をなさない者に至つては言語道斷である。又文を作るときには、設令單簡な手紙を書くにも、文字熟語に注意し、少しく曖昧なるときは必ず辭書に就て調べて見るのが肝要である。尙ほ一つの注意は文章を作るに當つて、名家の文章を参考とするのは甚だ必要であるが、萬一にも他人の文章を剽窃するが如きことをしてはならぬ。此の如きは學生の徳義上甚だ不都合のことなるのみならず、文章を作る目的をも没却するものである。

次に英語に就て一言せんに、英語の必要なることは今別に説くまでもないことと思ふ。英語は最も年若きとき細心の注意をなすことが最も必要である。發音の如きアクセントの如き、最初これを怠るとき

は永く惡癖をなして、後に至りて改めんとしても改めることが出来なくなる。故に單に文字を知り之を解するばかりでなく、その發音そのアクセントに就ては最も細密の注意をすることが必要である。綴り方に就ても同様である。兎角發音綴り方、書取等を以て輕易なることとして十分の注意をなさない弊がある。この不注意の結果は永くその弊害を留めて他日後悔しても及ばない。これ多くの人の經驗した所である。般鑑としなければならぬ。次に書物に假名を付けることも今日學生間に一般に行はれて居ることであるが、甚だ取らない所である。國語の場合に於て述べたが、英語を學ぶ爲にも辭書を何回となく用ひることが最も必要である。辭書と云へば予は切に原書の辭書を使用することに慣れるを希望する。註解書に依つて英語を學ばん

とするは、全く學修の方法を誤まつたものである。又復習の必要なることも殊に語學に於て見るのである。

若し又外國教師に就くことがあつたならば、それは如何に優良な日本の教師も與ふることの出来ない長所のあることを忘れてはならぬ。即ちその發音の如き、句調の如き、或は會話の如き、十分にその教授に注意をしなければならぬ。然るに今日の學生は往々外國教師の教授に十分に注意せぬ傾きがある。實に残念なことである。本當に外國語を學ぶには多くの年月と費用とを費して、その國に留學するといふ必要がある位である。適、外國教師に就きて直接に習ふことの出来るのは、得難い幸と云はなければならぬ。容易に得られない好機會である。この好機會は十分に注意して利用しなければならぬ。



又今日英語の教科書を選定するに就て教員の一大困難を感じるこ  
とがある。それは適當なる書物を得られないことではなくて、適當な  
るものと思はれるものには悉く註解書があるがために、これを選定す  
るも學生の學力を増進することを期し難いと云ふ點にあるのである。  
學生は註解書を大に便として居る。教師はこれを蛇蝎の如くに見て  
居る。もと教師と學生とは、利害の衝突するものではない筈である。  
教師が註解書を有害視するのが間違であらうか、學生が之を便とする  
のが誤りであらうか。

歴史地理に就て一言すれば、元來此の學科で授くることは個々の事  
實を以て成り立つ者である。素よりその事實の間には關係のあるも  
のであるが、その關係も亦他の學科に於ける如く、密接でない。それ故

に歴史地理を學ぶ者は、動もすれば個々別々の事實を記憶するに止ま  
つて、大體の了解觀察を逸するものが少くない。然るに個々の事實を  
悉く記憶すると云ふことは到底出来ないことであるから、學生は其の  
大體を了解して、其の要點を正確に記憶することを努めなければなら  
ぬ。或は試験方法の宜しきを得ないにも依るであらうかと思ふけれ  
ども、個々の事實を記憶するに止まつて、大體の脈絡關係を逸するが如  
き憾が少くない。何の爲に歴史を修め、何の爲に地理を學ぶか、その大  
體の目的を失はないやうに注意をすることが肝要であらう。

數學物理化學に就て云へば、是等の學科は歴史地理とは違ひ、前後の  
關係甚だ密接なるものである。一步は一步と離るべからざる階段關  
係がある。若し誤つてその階段の一つを了解せず終る時は、その後





雜なる發表の爲に費すが如きことなく、他日大なる傑作を出す基礎を築かんことを切に希望するものである。

備的練習  
の成果な  
り。ペ、デ  
ス。イ、デ、  
ロ

### 第七節 試験

試験は學生時代に於て最も懸念する處のものである。試験の性質は學生にとりて此の如く苦痛と感すべきものであらうか。前節に述べた如く今日の學生は競うてその創作を社會に出さうとして居る。元來自己の力を示さうとするには、試験は一の好機會ではなからうか。學生の試験を見ること實に蛇蝎の如くなるは、どうしても了解するに苦しむ所である。想ふに試験に對する間違つた考より生ずる者ではなからうか。元來試験に就ては教育者の間に於ても十分の研究がな

いやうに思はれる。試験は單に學生の學力を判定する爲に行ふ方法であるか、或はその勉勵を鼓舞する爲に行ふ方法であるか。實際に於ては試験を以て學生を強迫し、學生の放逸を防ぐ最も有効の方法の如くに見做して居る教師もある。學生の中には單に試験に及第するを以て目的となして居るが如き者も少くない。

試験はその文字の示す如く學生の學力を判定する方法である。然らば學生たる者は試験に依つて自己の實力を判定せらるゝことを期すべく、これを以て恐るべきものとし、心配すべきものとする必要はないのである。學力の判定は常に教師の參考となるのみならず、學生自身にとつても必要である。自己の學力を正確に判断することは後の發達を促す動力となる。然らば學生たる者は寧ろ試験を歓迎すべき

である。自己の實力はどの位であるか、自分は幾何の進歩をなしたか、これを知らんとするは人情ではあるまいか。試験を嫌ふといふことは、どうしても理由のないことではないか。

試験は確に學生の學力を判定する方法である。試験は學修の進歩の程度を知る方法であるからして、教育する者にとつても、又學修する者にとつても、之を知ることが最も肝要なることである。即ち教育する者にとつては、試験の結果を考へ、學生は果して豫期の進歩をなして居るか否かを考へ、授業の進行上に於て斟酌し工夫をする。又學生たる者は試験の成績を見て、或は大に勉強し、或はその勉強の方法を誤れるなきかを考へる。若し成績にして佳良なるときは、一時快哉を叫ぶに止まり、不良なるときは、或は失望し、或は試験問題の難きをかこち、或

は教師は冷酷なりと怨ずるが如きことあらば思はざるの甚しきものである。

試験は必ずしも學力を公平に示すものと云ふことは出来ないが、大體に於ては大なる誤のないものである。されば學校に於ける成績の優等なるものは他日學校を出た後に於ても概して優勝の位置を占めて居る。往々にして例外もあるけれども、試験の成績は大體實力の優劣を表示するものと看做すことが出来る。殊に試験の問題方法等にして漸次種々の改良工夫が加へられるときには、試験は一層よく學生の實力を表示するやうになる。學生たる者は試験の成績を見て、その後、に於ける學修の方法を考へなければならぬ。問題の不當、教師の冷酷等に就て愚痴をこぼすのは青年に似合はしからぬことである。

試験は學力の判定の外尙ほ學修を奨励することをその目的とするものである。人間の弱點として必要に迫り、若くは餘儀なくさるゝにあらざれば爲すべきことも爲さないと云ふことを免れない。理窟より考へて、人々皆其の爲す可きことを怠らないとしたならば、別に之を餘儀なくする手段や之を奨励する方法を執る必要はないけれども、人間は誰れでも弱點あるを免れない。學生は時々刻々學修を怠つてはならない。これは寔に間違のないことである。併ながら他に餘儀なくする機會がないときには、往々にしてその爲すべきことを怠るのも、已むを得ないことである。試験の爲に學生が勉強すると云ふことは事實である。これ人間の弱點を利用するに於て必ずしも非難すべきことではない。

予は學生が試験の際に平素よりも多く勉強すると云ふことは望まじきことで不都合なことではないと思ふ。併ながら平素よりも多く勉強すると云ふのも程度の問題である。言ふ迄もなく、その健康を害する如き程度まで、過度に勉強するのは大に非難しなければならぬ。試験前に徹夜をして勉強する如きは戒むべきことである。過度の勉強はその効果が案外少い。又平素は殆ど勉強せず唯、試験前に至つて、俄に過度の勉強を爲す者が多い。試験を嫌ふ主なる原因は此にあるであらう。平素相當に勉強を續けて居るものは、俄か勉強を爲すに及ばない、隨て試験を嫌ふこともない譯である。平素怠つて居て試験前に勉強することは學修の方法として最も非難しなければならぬ。勉強は則ち學修である。試験前平素より多く勉強すると云ふのも、學

修の或る目的を達する爲である。その目的を達せざるが如き勉強は無意義のものである。學修の目的を達する爲には平素相當の勉強を續けて行かなければならぬ。而して試験前に於ては較、多くの勉強を爲すべきである。かくて試験の際に一段の進歩を見ることが出来る。

予は試験前の學修に就て學生の注意を切に希望するものがある。それは如何なる考をもつて勉強するかと云ふことである。勤勉なる學生は平素相當の勉強を怠らない者である。其の勉強は日々受くる所の授業に就て或は豫修し或は復習するのである。それ故にその勉強は、或る學科或る事項の一部分に對して勉強するのである。學科全體を、通覽し、知識の間の聯絡關係を考へるが如きは、或は一學期の終り、或は學年の終りに復習することに依て初めて出来ることである。試

驗は此の全體を、通覽する機會を與へるものである。されば試験の際に、勉強するに當つては、その學びたる事項の前後の關係を、通覽する趣旨を常に念頭に置くやうにしたい。斯かる趣旨を以てするときには、試験前の勉強は非常に大なる効果のあるものである。たとひ斯く有意的に爲さないまでも、自然に前後を、通覽することになるけれども、能く前後關係の脈絡を、理解することを目的として準備するときには、その効果は一層大なるものがある。これ予の切に學生の注意せんことを希望する點である。若し試験の問題となりさうな部分のみを、選擇して勉強するが如きは、如何に努むるとも何等の効果がなると斷言する。不幸にして、僥倖心を以て勉強する者が多い、即ち無効の勉強を爲す者が少くない。残念のことである。苟も勉強するものは有効に爲して

もらひたい。眞に自己の學力を増進せんことを專一と心懸けて勉強してもらひたい。

試験の準備をなす場合に學科の中に於て主要なる點重大なる點に注意をするのは不當のことではない。學生の日々學修する所は説明上の徑路として往々技業に互ることもあつて、其の學修する所は悉く同様に重要であるとは言へない。然るに前後を通覽するにあらざれば、何れの點が果して重要であるか、何れが技業であるかと云ふことを明にすることが難い場合がある。試験の際特に注意してその重要な所に力を注ぐのは學修の目的より考へても當然のことである。

尙ほ一の注意すべきことは、試験の準備をなすに當つて單に記憶の力のみならず、傾向についてある。試験の際に於ける勉強

と言へば、唯たび／＼反復して、何事をも記憶せんとする者がある。かくして一時記憶する事項も、試験が済めば忽ちにして忘れるのである。即ち勉強は單に試験の爲であつて効果を永く後に留めない。斯の如きは甚だ愚なる所爲ではなからうか。然らば勉強の効果を永く留むる工夫は如何にすればよいか。そは専ら記憶のみに依頼せず理解するを主として勉強するのである。斯の如き用意を以て勉強するとき、試験は毫も恐怖すべきものでなく、一方に於ては、自己の實力を表明し、一方に於ては此の際に於て一段の進歩を見ると云ふことになる。かくて學生自身試験を以て學修上の必要方法と考へるやうになるであらう。予は切に學生の試験に對して正當なる考を下さんことを望むものである。



上來述べた如く試験はよく之を利用するときは學修上誠に有効の方法である。然るに今日の學生多くは試験の利益を收めずして、その害を受けて居る。世間にはこの有様を見て、試験は學修上にも有害であると言ふものがある。斯く論ずるものがあるけれども、試験は遂に廢されない、又いつまでたつて試験の廢される見込はないと思ふ。まして上に述べた如く、試験は學修上に於て必要なもの、之を利用するときは、その効能は大なるものであるとしたならば、之を廢すべきではない。務むべきことは如何に試験を利用するか、その方法を講ずるのにある。

## 第八節 落 第

教育若くは學修の程度は種々の段階に別つことが出来るのである。今日の普通の方法に依れば、年月を以て標準となし、一學年毎にその段階を別つことになつて居る。同一の年限、學修しても、各學生の才能は同一でなく、勉強の度も異り、又精神の發達に遅速あり、或は又身體、其の他の故障に依つて同一の進歩をなすことは期し難いのである。或る者は僅々の時間に於て爲し遂げ、或る者は多くの時間を要すると云ふことは何事に於ても見る所である。然らば、同一の年限を費すも遅速のあるのは已むを得ないことである。それ故に一學年學修したる後、或る者は及第し或る者は落第すると云ふことのあるは、怪むに足らないことである。

他の人が一年で修了する所を、己は二年を要すると云ふことであつ

失敗は英傑にとり

にては成功  
に達する功  
階梯となる  
るなりとな  
（ハリパ  
ートン）

知識の進  
むは歩一  
歩なり飛  
躍するに  
あらずに  
（マコー  
レ）  
大なる成  
業は一時  
にも生ず  
るに吾  
ら歩歩  
るを以て

學 修 法

たならば、甚だ遺憾であるけれども已むを得ないことである。しかし  
是は必ずしも恥辱とすることではない。若し落第することが自己の  
怠慢不勉強より生じたならば、それは大に恥づべしであるが、相當に勉  
強を繼續し來つたに拘らず、尙ほ他と步調を一にすることが出来ない  
と云ふ場合ならば、餘儀ないことである。先にも述べた如く、學修は其  
の基礎を堅固にしなればならぬ。故に學力の不十分なるに拘らず、  
鞏固ならざる土臺の上に進歩して行くと云ふことは、教育上決して正  
當なことではない。それは又本人の爲に取らないのは固よりである。  
されば落第のあるは學修上當然とする場合があるのみならず、又本人  
の爲に却て利益とする場合もある。然るに、學生は勿論その父兄も皆  
落第を以て非常なる罪惡の如く、非常なる恥辱の如く考へて居る。教

満足せざ  
るべから  
ず（スマ  
イルス）

育者も亦落第を以て恥辱とすべきことの如くに考へて居る。前に試  
験を以て學生を強迫する教師がある。と云ふたが、即ち落第を以て脅喝  
するのである。然るに別に多言を要するまでもなく、人に依つて心身  
の發達に遅速があり、又同一の仕事なすにも遅速のあることを考へ  
たならば、落第と云ふことのあるは當然のことではないか。若し總て  
の人をして強ひて同一の時間に同一の仕事なさしめやうとしたな  
らば、或る者は正確に之を爲すことを得るけれども、或る者は不正確に  
之をなすにとどめて置かなければならぬといふことを免れない。不  
完全に事を爲してそれを以て満足することは勿論出来ないことであ  
る。併ながら若し同一の時期に同一の仕事なすしめやうとしたな  
らば、人に依ては不完全なる仕事を以て満足しなればならぬと云ふ

ことになる。知識を修得する上に於ては各階段に於て一歩々々完全に鞏固に基礎を置かなければならぬ。不完全に、粗末に之をなすことは教育上に於て大に排斥しなければならぬ。

予は固より落第を奨励しようといふ考をもつてゐる者ではないが、當然なる落第は已むを得ないこと、學生も、その父兄も又は教師もさう考へるやうにありたいと思ふ。世人は如何なる場合に於ても落第は大なる恥辱であると考へるのであるから、随つて學生はあらゆる手段を盡して之を避けようとする。試験の間際に無理なる勉強をなし、將來の効果を考へずして一時目前の僥倖を期せんとするが如きも、一にこの落第を恐れ之れを避けんとするより生ずるのである。甚だしきは不正のことをなしてまでも、落第を避けようとするのがある。或

は種々の運動を爲し情實に訴へてこの恥辱を免がれようとする者がある。

若し一時の勉強のため、僥倖にして試験に及第することがあつても、其の者に相當の實力が具はつて居なければ、進級したる後に於ての學修は決して望ましい發達をなすことは出来ない。その者は常に明瞭な正確な知識を得ることが出来ずして、不明若しくは半解の間に學修を繼續しなければならぬ。斯かる状態で學修を進行するのは甚だしい苦痛である。若し夫れ不正の手段に依り、若くは情實に依つて進級することを得るが如きに至つては、實に言語道斷で單に其のこの責むべく、惡むべきばかりでなく、更に其の人の前途の爲に大に悲まざるを得ない。固より不勉強なるが爲に落第を來したやうな場合には、之

を責むる理由は大にある。併ながらその咎の歸する所は不勉強にあるのであつて、必ずしも落第の結果を待つて後に責むべきではない。よし進級することが出来ても、不勉強なる者は飽までも之を責めなければならぬ。若し又天稟の才能が鈍い爲に、或は發達の遅いために、相當に勉強したにも拘らず落第したやうな場合には、咎むべき點を見出すことは出来ない。

要するに落第は今日世人の考へるが如き罪惡でもなく、又恥辱でもない。まして教師が生徒を脅喝する具に供すべきものではない。父兄の情として、その子弟が學校で一年後れることを好まないのは、同情すべきことであるが、これは已むことを得ない。落第すべき者の落第するのは當然のことで、將來の進歩の上に於て却つて本人の利益とな

るものである。今日一般に行はれる進級の方法は、千古不易の道理に基いたものではない。即ち點數を以て言へば、六十點以上を得る者及び第とするが如き、便宜上一の約束に過ぎない。これは人爲の取極めであつて、斯く定めなければならぬと云ふ理由はない。何故に七十點を以て及第の最低度としないのであるか。甚だ理由に乏しいことである。故に今日たとひ及第することの出来る者にあつても、予は其の或るものに就ては、却つて之を原級に留めて學業の鞏固なる發達を期する方が利益であらうと思ふ。常に學科に逐はれて追付くことの出来ないやうな有様を以て進むよりも、多少の餘裕があつて進む方がよいと思ふのである。

落第を以て非常な恥辱と考へたるために、偶落第した者は、更に勇氣



未だ曾て  
邪は正に  
勝たず  
(管公)  
天道は親  
なく、常  
に善人に  
與みず  
(老子)

學 修 法

一六

最大の恥辱である。然るに落第を以て恥辱とするのは多いが、カンニングを以て罪惡と考へないやうな有様である。實に寒心すべき極である。不正の行爲を敢てして、實力を養はうとしないのは學修の目的を破るものである。學修の根柢を覆へすものである。不正の行爲は單に道徳上の不都合と見なければならぬ。ばかりでなく、知識の修得上に於て最大の敵と見做さなければならぬ。怠慢も知識の修得上に於ては一の敵であるが、不正は更に大に恐るべき敵と看なければならぬ。不正の行爲を敢てする者は學修上に於て誠實なきものである。熱心なきものである。怠惰よりも一層惡むべく、恐るべきものである。何人もカンニングを以て恕すべしとする者はなからう。現在學校に於て其の廣く行はれる所を見ては、如何なる手段を盡しても之を根

絶することを努めなければならぬ。然るにこの點に關する注意が一般に足りないかと思ふ。學校に於ては試験の際監督を嚴にして居るのである。或は之を發見したる場合に於ては相當なる處分をして、その矯正を圖ると云ふこともして居る。予は此の點に關する監督は、如何に之を嚴重にするも不當ではないと信ずる。若し此の不正なことが廣く行はれるとしたならば、全力を盡して之を防がなければならぬ。一旦其の事實を發見したならば、最も嚴重の罰に處して相當であらうと思ふ。されど是等は外よりする方法である。更に根本的に救濟する方法としては、學生自身がその非常なる罪惡であり恥辱であることを十分に了解して、學生相互の間に於て常に相戒めると云ふことであらうと信ずる。あらゆる方法を盡して、學生間の制裁をしてこの

點に關して最も有力ならしめなければならぬ。こゝに學生に向つては、予は學生自身の良心と本分とに直接に訴へ、何のために學修をなすかあるかを體認して、他の監督救済の方法を須たす、學生自身に斯の如き惡風を一掃せんことを要求せざるを得ない。學生間に於て不正の行爲を認容するは、決して學友相交はる道ではない。不正の行爲を認容するは、却つてその者を誤る所以である。之を嚴重に忠告し、之に向つて學生間の制裁を加へるのは、決して不相當のことでないのみならず、不正の行爲をなす學生其の者の爲である。試験の際に學校に於て嚴重なる監督の方法を講ずると云ふが如きは、實は學生に對する一種の侮辱といつてもよい。

我が學生間のこの惡風は、之を外國の學校生徒に於ても見るかとい

ふに、甚だ遺憾なことには獨り我が國に熾んにして、外國に於ては稀に見る所である。斯の如き卑劣の行爲を爲す者は、外國の學校生徒の間にも一人もないと云ふことを斷言することは出來ぬけれども、殆ど例外である。日本に於ては普通である。是れ國辱ではなからうか。若し此の風にして永く繼續することがあつたならば、其の結果國民一般の氣風の上に、誠實な精神、眞面目なる考を失ふやうになるであらうと思ふ。此の事は單に學生間に於ける一の惡風として輕々に看過すべきことではなく、非常に恐るべきことであると思ふ。前節に述べた如く、落第は必ずしも恥辱でない。不正なることをして進級するのは、何れの方面から考へても大なる恥辱と言はなければならぬ。學生たる者は大に反省して、斯の如き惡風を一日も速に一掃するに至らんことを

期せなければならぬ。

多數の學生の内から、偶二三の墮落生が出たり、不良學生が出たり、又は突飛な間違つた考をもつ者が出たりするのは好ましいことではないが、已むを得ない、又左程心配するに及ばない。勿論さういふものが澤山あるといふのならば、心配するのも尤であるが、今日青年の意氣が銷沈したとか、厭世的思想があるとか云ふけれども、實際は、その數は多いのではない。之に反してこの不正のことをするものは中々多い。予はこの事を以て最も憂ふべきもので、之を以て前のことに比すれば大なる差があると信ずる。素より社會に惡人の存在するが如く、多くの學生中より、かゝる卑劣な事をするものが二三出るのは已むを得ないとしても、今日の如く滔々として此の不正行爲の廣く行はれるのは

實に痛嘆すべきである。

### 第十節 智力の發達

智力の作用は種々に別つことが出来る。今ことに必要なる點のみを擧ぐれば、記憶するが如きは智力の一の重要な働きである、事物又は思想の概念を作るが如きも重要な働きである。概念と概念との關係を知る所のもは所謂判斷と稱するものである。是れも亦一の重要な智力の作用である。更に判斷と判斷との關係を知るものは推理の作用と稱するものである。教育の目的、即ち學修の目的は、是等の智力の働きを發達せしむるにある。是等の働きを發達せしむる爲には種々の知識を與へなければならぬ。併ながら普通教育に於て





學修の大目的であるとしたならば常に此の點に注意しなければならぬ。試験の結果によりて知識の多少は知ることが出来るが、記憶、判斷、推理等の能力が果して十分の發育を爲して居るか否かを知るは、自己の心内を自ら觀察するに依る外はない。かくて精神能力の發達如何を知ることは必ずしも出來難きことではない。固より知識の分量を知るが如く容易ではないけれども、決して出來難いことではない。學生たる者はよくこの點に注意してもらひたい。斯の如くして學修の目的を完全に達することが出来る。唯、多くの知識を詰め込むことを努めるのは非難しなければならぬ。知識そのものも必要であるが我精神の作用を強くし善くすることは一層重大である。この働きが十分に發達して居るときに、知識は益、それに依て増進せられ應用せられ

活用されるのである。學生は智力の發達といふ點に十分注意すべきであらう。

## 第四章 徳性の修養

## 第一節 青年の特質

前章知識の修得に關し、今日のやうに専ら教師に依頼し、書物に依頼して居つては、教育學修の効力が十分でない<sup>一</sup>と云ふことを反覆し、如何に學修すべきか、その方法の重なるものを説いた。しかし學校に入りて餘儀なくされて勉強し、又試験に逐はれて勉強しても、その間に知識上相當の進歩をなすものである、道徳上のことは、自ら進んで努めなくては、その効が全く無い。餘儀なくせられて爲したことは道徳上値打がない。知識の修得も十分にその効を擧げるためには、自發的奮勵に依らなければならぬが、徳性の修養は一層自己の力、自己の修養に待

つものである。

修養を爲さんとするに先ち、第一に青年の特質、殊にその美質を明にすることが必要であらう。予は青年は第一に無邪氣でなければならぬと考へる。全體青年の無邪氣であるのはその天性である。然るに青年にして、動もすれば老成人の如き氣風のある者がある。甚だ望ましからぬことである。青年はその好む所を好むとし、その惡む所を惡むとし、欲する所は明に之を欲すとし、欲せざる所は明に之を欲せずとなし、その言語舉動、總て單純であることを望む。その天真ならんことを望む。大人に至つては、種々の事情を斟酌し、周圍の人に遠慮するが如き、已むを得ないことがある。青年は飽くまでも無邪氣でありたい、言ひ換へれば青年は青年らしくなければならぬ。概して日本の青年

は早く老成する傾きがありはしないか。或は日本人は早熟早老であるかと云ふ。この説は幾分の眞理を含んで居るものではなからうか。十七八歳の青年の如き西洋に於ては極めて子供らしい。我國の青年は此の時期に於ては羞恥の感が不相應に發達して、子供らしき美質を失ふやうである。大器晩成といふことがある。早く老成するは好ましいことでない。

次に青年の特質の一として、元氣活氣に富んで居ると云ふことを挙げたい。然るに往々にして元氣を失ひ、活氣に乏しい者がある。固より粗暴の舉動の如きは、たとひ青年に於ても許すべきことではないが、言語舉動等の活潑なことは、粗暴と同一視すべき事でない。粗暴は思慮の乏き所より起り、又我儘より生ずるのである。青年には元氣を尙

重運深沈のものは、能く大なる事を、能く處する、輕躁す、のものは、小事をも、處する、と、能く、鈍翁(陶山)は

天使は最も、恭謙なる、人の言、に、耳を傾、く、(アル)

ぶけれども、我意を張るのは、最も戒めなければならぬ。十分に意見の一定した大人に於ては、其の主張を維持すべきは當然のことであるが、青年は思慮尙ほ淺く經驗乏しきが故に、堅く主張すべき意見のある譯はない。青年は單純に迅速に成人の意見に服従すべきである。即ち元氣なると共に従順なるは青年の一の特質である。父兄師長の命に従順であると云ふことは、青年の美質であつて、決して斥くべきことではない。又青年の時代は他の指導を須つものであるから、其の従順なるは當然のことである。而して従順は元氣と兩立するものである。青年が命令に就て、其の利害を考へ、其の理由を問ふが如きは、既に無邪氣でない。

壯年者は自ら思慮し、自ら行爲しなければならぬ。獨立しなければ